

平成14年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館

実績報告書

目 次

独立行政法人国立美術館の概要
I 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
II 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
1. 収集・保管
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況
(2) 保管の状況
(3) 修理の状況
2. 公衆への観覧
(1) 展覧会の状況
本館
「常設展」
「カンディンスキー」展（共催展）
「写真の現在2 サイトー場所と光景」（特別展）
「小倉遊亀」展（共催展）
「現代美術への視点 連続と侵犯」（特別展）
「ヴォルフガング・ライプ」展（企画展）
「青木繁と近代日本のロマンティシズム」展（共催展）
工芸館
「常設展」
「森正洋—陶磁器デザインの革新一展」（特別展）
「昭和の桃山復興展」（特別展）
「クッションから都市計画まで—ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザイン の諸相 1900—1927」展（特別展）
「今日の人形芸術 想念の造形展」（共催展）
国立博物館・美術館巡回展
「日本人の風景表現」展
(2) 貸与・特別観覧の状況
3. 調査研究
4. 教育普及
(1) —1 資料の収集及び公開（観覧）の状況
(1) —2 広報活動の状況
(1) —3 デジタル化の状況
(2) —1 児童生徒を対象とした事業
(2) —2 講演会等の事業
(3) —1 研修の取組
(3) —2 大学等との連携
(3) —3 ボランティアの活用状況
(4) 渉外活動
5. その他の入館者サービス

○ 独立行政法人国立美術館の概要

【東京国立近代美術館】

1. 目的

東京国立近代美術館は、昭和27年に日本で最初の国立美術館として開館した。当時は、先行するミュージアム施設としては国立博物館のみであり、従って当館は国立博物館に対して、広い意味で同時代の日本美術を常時展観できる近代美術館として性格づけられた。

当館は、竹橋に、本館及び工芸館、京橋にフィルムセンターを有し、世界の近代美術の流れの中で、わが国の近代美術の系譜を跡づけ、広く美術への関心を喚起することを目的として、企画展、常設展等の展覧事業のみならず、20世紀を中心とした近代の美術・工芸作品、映画フィルムや関連資料の収集・保存、内外の美術活動についての継続的な調査研究、教育普及、出版物の刊行等、幅広く事業を行っている。

2. 土地・建物

(1) 本館

建面積	4,511 m ²
延べ面積	17,192 m ²
展示面積	4,599 m ²
収蔵庫面積	1,840 m ²

(2) 工芸館

建面積	929 m ²
延べ面積	1,858 m ²
展示面積	568 m ²
収蔵庫面積	168 m ²

3. 定員 43人 (うち11本部併任)

4. 予算 1,374,656,760円

I 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - 外部委託の推進
 - 事務のOA化の推進
 - 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - 積極的な一般競争入札を導入
- 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

【東京国立近代美術館本館・工芸館】

実績

- 業務の一元化
本部において、これまで行っている人事、共済、給与事務の一元化に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
- 省エネルギー等（リサイクル）
 - 光熱水量
 - 本館
省エネルギーに対する職員の意識を確立し、全館でこまめに節電を行い経費節減を図った。

ア. 電気 使用量	2,669,209kw	(前年度比 - %)	料金	42,106,895円	(前年度比 - %)
イ. 水道 使用量	14,292m ³	(前年度比 - %)	料金	8,472,473円	(前年度比 - %)
ウ. ガス 使用量	391,404m ³	(前年度比 - %)	料金	37,293,960円	(前年度比 - %)

 - 工芸館
電気の使用量については入館者数が増えたことにより2.5%増であるが、年間のうち使用料単価の高い夏季期間の使用量減により料金は前年度を下回った。

ア. 電気 使用量	360,860kw	(前年度比102.5%)	料金	7,019,115円	(前年度比89.3%)
イ. 水道 使用量	774m ³	(前年度比91.3%)	料金	334,923円	(前年度比89.1%)
 - 廃棄物処理量
館内LANの活用による職員周知文書や会議開催案内によりペーパーレス化を実施した。
 - 本館

ア. 一般廃棄物	14,340Kg	(前年度比 - %)	料金	585,396円	(前年度比 - %)
イ. 産業廃棄物	3,590Kg	(前年度比 - %)	料金	321,967円	(前年度比 - %)

 - 工芸館

ア. 一般廃棄物	3,230Kg	(前年度比85.2%)	料金	67,830円	(前年度比85.2%)
イ. 産業廃棄物	600Kg	(前年度比80.0%)	料金	20,787円	(前年度比80.0%)
 - その他 古紙の再利用、OA機器等のトナーカートリッジリサイクルによる再生使用
 - 施設の有効利用
講堂等の利用率9% (32日/365日)

講演会	7日
ギャラリートーク	7日
美術館レクチャー	5日
協議会等	13日
 - 外部委託
14年度も下記の外部委託を行い業務の効率化を図った。今後も各業務の見直しを行い、外部委託の可能なものの検討を進めていく。
 - 会場管理業務
 - 収入金等集配業務

- | | |
|----------|------------------|
| 2 設備管理業務 | 7 レストラン運営業務 |
| 3 清掃業務 | 8 アートライブラリ運営業務 |
| 4 保安警備業務 | 9 ミュージアムショップ運営業務 |
| 5 機械警備業務 | |

5. O A化

館内LANの整備状況

館内LANは全館内に整備されており、各職員が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。館内LANは文書ファイルの共有、Eメールによる事務連絡に活用されており、事務の効率化が図られている。

紙の使用量 942,500枚（前年度比194.9%）

A 4 862,500枚

A 3 37,500枚

B 5 10,000枚

B 4 32,500枚

6. 一般競争入札

美術館では所蔵作品を多数保有しているため、保安上の観点から、会場管理業務、設備管理業務、清掃業務について指名競争を行っている。

1本館、工芸館 一般競争入札件数 1件（総契約件数70件）「現代美術の視点」展展示室設営工事

7. 評議員会

（1）評議員会

①開催回数 2回（平成14年10月1日(火)、平成15年3月17日(月)）

②議事内容

第1回 平成14年10月1日(火)

平成13年度事業の実施状況及び平成13年度文部科学省評価委員会の評価結果についての報告、意見交換。特に平成15年度実施を予定しているガイドボランティア、小中学校生の入館者数をいかに増加させるか等について意見交換。

第2回 平成15年3月17日(月)

平成14年度事業報告及び平成15年度事業計画について協議。

ガイドボランティアの実施及び高等学校の生徒に対する新たな料金区分の設定については積極的に評価。今後の課題として外国人旅行者に対するサービスの内容と普及広報活動の充実について意見交換。

8. 特記事項

1 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなどの施設の有効利用の推進

今後は講堂の有効利用に努めるため、さらなる広報活動を行い対外的な認知を高めたい。

2 研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善

独立行政法人特有の会計処理、消費税計算の概要の研修会、放送大学通信教育の簿記入門科目などを受講し職員の資質の向上を図られた。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

昨年度に引き続き、業務運営の効率化に積極的に取り組み、年度計画を達成できた。

【見直し又は改善を要する点】

省エネルギーにかかる経費節約及び廃棄物の減量に関しては、本館が平成11年7月から平成14年1月（事務所移転は平成13年度9月）まで増改築工事により休館しており、平成13年度と直接比較ができないことから、平成15年度以降、平成14年度と比較・分析を行っていきたい。

紙の使用量については両面印刷を活用する等節約を進めてきたが、前年度と比較して194.9%の増加となった。もちろん、新館が本格的に稼働したことによるが、これは、新たな広報事業（入場者への無料配布する、常設展の主な作品リスト・特別展展示替案内・外国人向けの展覧会概要）により来館者へのサービスを充実した結果が、この使用量となった。今後はサービスとコスト面での分析を行い可能な限り来館者へのサービスを行っていききたい。

施設の有効利用については講堂の対外的な貸付を行ってきたが、結果として利用率があまり良くなかった。今後は、さらなる広報活動を行い対外的な認知を高めることが必要である。

【計画を達成するために障害となっている点】

入場者数や、季節の寒暖によって、光熱水料が増減することとなり、それを正確に把握することは困難である。

Ⅱ 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立近代美術館)

近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。

また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

○実績

1. 購入 69件、うち国宝 0件、重要文化財 0件

2. 寄贈 79件、うち国宝 0件、重要文化財 0件

3. 寄託 279件、うち国宝 0件、重要文化財 0件

4. 陳列品購入経費 予算額 255,866,000円 決算額 261,393,050円

5. 特記事項

美術作品の収集における欠落部分の補充については、自己点検評価に記したような成果をあげた。また、寄贈による収集成果として、藤島武二・藤田嗣治らの油彩画、石本正の日本画、北代省三・木村賢太郎の彫刻のほか、当館のコレクションでは手薄なP.アレシンスキーなど海外作家4人の版画作品を含む計56点を所蔵作品に加えることができた。

また、美術作品の取り扱いに関する研究員の指導としては、当館主任研究官がこれに当たったほか、新規採用の研究員は、東京文化財研究所保存科学部による「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」を履修した。

なお、当館は今年度の新収集作品を含めて、すべての所蔵作品について、修理データ等をも記載したカルテを制作しているが、作品の状態や修理については作品の形式に準じた個別的な要因が多く、共通規格に基づくデータベース化の可能性については4館学芸課長で検討していきたい。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：開館以来、わが国の近代美術を系統的に展観できるコレクションの形成をめざして、継続的な収集に努めてきた結果、当館のコレクションは、全体としては大きな欠落の比較的小さいものとなりつつあるが、個々の作家・流派レベルでいえばなお一層の充実を期すべき部分も多く、それらの補填が収集活動の重要な課題の一つとなっている。

平成14年度の新収集作品の中で、今村紫紅は当館が永らく収集の機会に恵まれなかった作家であるが、昨年度に購入した紫紅最晩年の《春先》(1916)に続いて、この年は初期の《笛》(1900年頃)を収蔵した。また中村彝については、これまで2点の肖像画、《田中館博士の肖像》(1916)および《エロシエンコ氏の像》(1920)を所蔵するのみであったが、ようやく密度の高い風景画《大島風景》(1914-15)を、襲光についても、東洋の古画(宋元画など)への理解を深め、細密描写による幻想表現へと進んだ晩年の《蝶》(1942)を収集作品に加えることができた。いずれも、時代のさまざまな潮流が交錯する中に彼らを位置づけ、その芸術と、時代を、多面的に展望する上で貴重な作例となると考えている。

戦後、半世紀が過ぎ、1950-60年代に世に出た「現代作家」たちの新旧の作品が、すでに歴史的な補填の対象となり始めている。この点では、草間彌生の現存する最初の油彩画《残骸のアキュムレーション(離人カーテンの囚人)》(1950)や、李禹煥の比較的近年の絵画作品《風と共に》(1990)等を購入したこと。また北代省

三のご遺族より、存在が確認されている唯一のモビール作品、《モビール・オブジェ（回転する面による構成）》（1953）の寄贈を受けたことなどは大きな成果と考える。

戦前と戦後（あるいは現代）、日本と海外の作品を、単年度内でバランスよく収集するのははなはだ困難であるが、平成14年度には、すでに実績のある現代作家として秋岡美帆、岡崎乾二郎、鷺見和紀郎、黒川弘毅などの近作を収蔵した。また、海外の作品としては、ベルリン分離派の創設に参加したL. コリントの版画集「死の舞踏」（1922年刊）を購入したほか、当館の「メタファーとシンボル」展（1984）に出品し、その後、国際的活躍の目覚ましいイギリスの彫刻家、A. ゴームリーの近作《反映／思索》（2000）を収集した。

平成2年度より本格的な収集を開始した写真作品については、北井一夫の木村伊兵衛賞受賞作「村へ」シリーズ中のプリント26点（1973-75／うち寄贈4点）、「写真の現在2 サイト—場所と光景」展出品作より伊藤義彦4点（1999-2000／うち寄贈2点）、鈴木理策22点（2001／うち寄贈2点）、また戦前の海外の写真家の作品として、F. アンリ（アメリカ生まれ）、A. ケルテス（ハンガリー生まれ）、J. フンケ（チェコ生まれ）らのポートフォリオ等を収集した。

今年度の作品のうち、草間彌生の購入作品2点は、作家の渡米（1957年）前の初期の作品であり、これまで作家が手放さなかったものである。平成13年度に開催したリニューアル記念展「未完の世紀—20世紀美術がのこすもの」展での出品交渉から約2年をかけての交渉の中で、2点一括の収集であればとの条件で購入できたものである。このような地道な交渉は、コレクションの充実のためには、今後とも必要であると考えている。

なお、寄託関係では、恩地孝四郎の版画60点をはじめとして79点の寄託を新たに受けた。

工芸館：工芸館のコレクションは、文化庁が収集した重要無形文化財保持者の作品や日本伝統工芸展の出品作の管理換から出発している。従って様々な傾向のある近現代工芸の中で、戦後の伝統工芸に偏っていたきらいがあった。そこで開館以来20数年の中で、その偏りを正し、近代工芸ならびにデザインを歴史的・系統的に展観できるようなコレクションの形成を目指してきた。その中で、戦後の様々な傾向の作品はある程度収集することができたが、近代の始まりである明治期、また新しい傾向の工芸が生まれてくる大正中頃から昭和初期の作品、戦後の新しい傾向を示す作品などがまだまだ不十分である。日本の近代デザイン作品については、グラフィックデザイン作品収集が一定の前進を見せているものの、工業デザインは極めて不十分であり、また諸外国作品の収集は工芸、デザイン両部門ともまだまだ不十分であり、これらも系統的に収集することが重要であると考えている。当面、主要作家、デザイナーの作品を収集し、コレクションの核を形成することが課題であると考えている。

今年度は明治期の代表的な作品である初代宮川香山《鳩桜花図高浮彫花瓶一對》を収蔵することができた。今年度寄託された初代永澤永信《白磁籠目花鳥貼付飾壺》と共に、これにより近代工芸の冒頭に位置する作品を得たことで、常設展が一層充実することとなった。

またバーナード・リーチの《ティー・セット》が収集され、ヨーロッパの個人作家活動がはじまった初期の作品を収集作品に加えることができた。このことによってヨーロッパ陶芸の系統的展示の冒頭部分に初めての作例が加えられた。同じくイギリスの陶芸家、ハンス・コパー《スピード・フォーム》が収集され、戦後ヨーロッパの代表的作家の作品を充実することができた。また比較的手薄であった昭和初期の作例、飯塚琅珩齋《手篋》が収集された。さらに戦後の代表的作家である八木一夫、熊倉順吉、藤田喬平、小名木陽一の代表的作品が収集され、歴史的展示の充実がはかられた。寄贈によって森正洋のデザイン作品が大量に収集されたが、これは日本の戦後工業デザインの作品収集の初めての例になるものである。

【計画を達成するために障害となっている点】

本館：収集については、作品が市場に出ることが必要となるため、必ずしも美術館が希望する作品を収集するには制約がある。

工芸館：20世紀の初め頃から制作され始めるモダンデザインの初期の頃の作例を収集し、歴史的展示の充実を計りたいが、これらは海外のオークションに掛けられることが多く、かなり価格が高いこともあって、収集形態、予算ともども検討していきたい。

* 添付資料

- ① 収集した美術作品件数の推移（定量的数値推移一覧表 p.1）
- ② 寄託された美術作品件数の推移（定量的数値推移一覧表 p.2）

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

○実 績

1. 温湿度

(1) 本館

① 展示会場

空調実施時間 24時間

温度 25.0℃ 湿度 55% (夏期)

温度 21.5℃ 湿度 53% (冬期)

*上記の数値は、入館者が入ったときの設定(目標)値である。

② 収蔵庫

空調実施時間 24時間

温度 20.0℃ 湿度 55% (日本画等)

温度 20.0℃ 湿度 53% (油彩画等)

(2) 工芸館

① 展示会場

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0℃ 湿度 50%

② 収蔵庫

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0℃ 湿度 50%

2. 照明

本館、工芸館共

すべての蛍光灯は紫外線防止3,000K(博物館美術館用)

無段階調光可能

高演色タイプ

① 展示室 蛍光灯間接照明、スポットライト(ハロゲン、着脱式)

② 展示ケース 蛍光灯ライン照明

3. 空気汚染

2か月に1回、建築物における衛生的環境の確保に関する法律に基づき空気環境測定を実施。

展示室では炭酸ガス排出のための排気ファンを運転している。

フィルター等管理

・展示室 ロール、マット、中性能

・外気取り入れ口 ロール、マット、中性能、ケミカル

4. 防災

(1) 本館

- ・ 機械警備による監視、及び中央監視室での監視。また、火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員、看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し、警察、消防へ直ちに通報される。

・ 自動火災報知設備

煙感知器 煙式スポット型(イオン化式、光電式)

熱感知器 差動式分布型、定温式・差動式スポット型

ガス探知機 窒素ガス・液化炭酸ガス消化設備用

・ 消火設備

消火装置 窒素ガス・液化炭酸ガス消火設備(展示室、新収蔵庫)

ハロゲン化物消火設備(旧収蔵庫)

消火器具 ABC型粉末消火器具
消火栓

(2) 工芸館

- ・ 機械警備による監視、及び事務室の監視。また、火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員、看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し、警察、消防へ直ちに通報される。
- ・ 自動火災報知設備
 - 煙感知器 煙式スポット型（イオン化式、光電式）
 - 熱感知器 差動式分布型、定温式・差動式スポット型
- ・ 消火設備
 - 消火装置 ハロゲン化物消火設備（収蔵庫）
 - 消火器具 ABC型粉末消火器具
 - 消火栓
- ・ 東京国立近代美術館工芸館自衛消防訓練（麴町消防署との合同訓練）
平成15年1月20日（月）9：30～11：00
参加人数：約25名
文化財防火週間（平成15年1月23日（木）～29日（水））に向けて、麴町消防署との合同訓練を実施し、本番さながらの訓練に防災意識を新たにした。

5. 防犯

- ・ 警備 本館 有人警備（8：00～19：00、金曜日は21：00まで）
工芸館 有人警備（8：30～18：15）
本館、工芸館共に建物が無人となるときは機械警備を実施（24時間対応可能）。
- ・ 展示室内 開館時間中は常時展示室内に看士を配置、警備員による随時巡回
- ・ 展示ケース ガラスセンサーを設置、機械警備と連動（本館）
- ・ 館内各所に監視カメラを設置、警備員による監視。収蔵庫等は作業時を除き、常時機械警備を実施（本館）。

6. 特記事項

保存カルテ作成件数

本館については、平成14年度の新収集作品を含めて、すべての所蔵作品の保存カルテを作成している。工芸館については、作品の現状をチェックし、修理が必要な作品について所蔵作品データベース上に記載する作業を進め、必要な作品から修理を進めるようにしている。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館においては、24時間空調の実施によって、展示会場、収蔵庫ともに適切な保存環境が整備されている。工芸館は建物規模が小さく、密閉性の高い建物であるため基本的に気温、湿度とも激変することはないことから、24時間空調は行っていないが、保存環境は適切に保たれている。ただし、金工収蔵庫のみ除湿機を24時間稼働させている。

【見直し又は改善を要する点】

画卷用の展示ケースの構造など、展示設備等の細部については検討すべき点があり、照度の調節機能の付加など、今後検討していきたい。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

- ① 緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
- ② 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

〇実績

1. 修理件数

日本画	3件
洋画	8件
水彩・素描	5件
版画	24件
彫刻	4件
陶磁	0件
漆工・木工・竹工	1件
染織	0件
金工	0件

2. 修理経費 予算額 18,724,000円 決算額 16,380,945円

3. 特記事項

修理業者への指導

抜本的な修理を行なうか、それとも部分的な修理を施して、その後の経過を継続的に観察していくかなど、処置の方法については修理業者と綿密な話し合いを行った上で委託し、修理報告書の提出を義務づけている。

〇自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：毎年、修理を要する作品の洗い出しと実施を続けてきた結果、現在では、緊急の修理を要する作品（すなわち、収蔵庫で保管する上で問題のあるような作品）はほとんど無いと言ってよい状況にある。とはいえ、明治・大正期の作品に関しては、大なり小なり状態に問題があるものも多く、収蔵庫内での保管には支障が無いが、ギャラリーでの展示には多少問題のある作品や、館内での展示には支障が無いが、貸出（輸送）については危惧がある作品が多い。この点については、常設展示や貸出の準備段階における作品の状態チェックが、所蔵作品の診断の機会となっており、平成14年度は、そうした展示・貸出目的のために早急な修復措置を必要とする作品の中から、別表作品の修理を行った。

工芸館：常に作品の現状について把握するよう努めており、大きな問題のある作品はない。ただ、通常の展示や貸し出し作業中に付く汚れ程度の問題が生じている。また工芸品特有の経年変化が生じ、痩せ（木材の合わせた部分が温湿度の変化でわずかにずれる）や糊の黄ばみ（充分落ちていなかった糊が染みになる）などが発生しているものがある。こうした作品は、これまで計画的に修理を進めてきた。その中で平成14年度は漆工作品1点の修理を行った。この作品は我が国を代表する漆作家、松田権六の主要な作品であり、常設展示でも頻りに展示する作品である。蒔絵の保存修理や擦り傷の修復を行えたことは、有意義であった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：絵画・彫刻に比して点数の膨大な版画作品については、組織的な状態チェックと処置が必要な作品群もあり、平成14年度は、長谷川潔ほかの修理を重点的に行った。今後とも、版画については、中期的展望をもって修理を行ってきたい。

工芸館：工芸作品は、漆工作品、金工作品などの湿度の影響を受けやすい作品や染織作品のように紫外線や温度による品質の劣化を受けやすい作品など保存活用の際に留意すべき点が多いものがある。今後とも修理を必要とするものを計画的に実施する必要があると考える。

【計画を達成するために障害となっている点】

保存修復の専門職員を擁しないため、この方面についての他館への協力・寄与については、専門家の紹介程度しかできない。

*** 添付資料**

修理した美術作品の点数（定量的数値推移一覧表 p.3）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。

(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

本館 年3～5回程度

工芸館 年2～3回程度

(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。

(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。

(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。

なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。

また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。

(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

○実績(総括表)

1. 常設展

(1) 本館

展示替 5回(屏風及び軸装の日本画等については、原則的に各会期間に展示替えを行った。)

(2) 工芸館

展示替 3回

2. 特別展・共催展 10回

(1) 本館(中期計画記載回数:年3～5回)

① カンディンスキー 展

② 写真の現在2 サイトー場所と光景 展

③ 小倉遊亀展 展

④ 現代美術への視点 連続と侵犯 展

⑤ ヴォルフガング・ライブ 展

⑥ 青木繁と近代日本のロマンティシズム 展

*ただし「青木繁と近代日本のロマンティシズム展」の会期は平成15年5月11日まで

(2) 工芸館(中期計画記載回数:年2～3回)

① 森正洋—陶磁器デザインの革新— 展

② 昭和の桃山復興—陶芸近代化の転換点 展

③ クッションから都市計画まで ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟 展

④ 今日の人形芸術 想念の造形 展

3. 入館者数 462,138人(目標入場者数282,000人)

(1) 本館

① 常設展示

134,317人 (目標入場者数 29,000人 平成13年度入場者数 3,712人 対前年度比 362%)

② 企画展

269,731人 (目標入場者数 206,000人 平成13年度入場者数 80,656人 対前年度比 334%)

(2) 工芸館

① 常設展示

21,435人 (目標入場者数 22,000人 平成13年度入場者数 18,760人 対前年度比 114%)

② 企画展

36,655人 (目標入場者数 25,000人 平成13年度入場者数 20,478人 対前年度比 179%)

目標入場者数の設定にあたっては、基本的に当館で行われた同種の展覧会の入館者数のほか、他館での展覧会データもあればそれも参考にしている。その上で、歴史的な評価の変動や世代による価値観の多様化といった時間の経過からくる変化、同種展覧会の開催頻度、知名度、単独主催か共催かといった運営形態、展覧会にかかった労力や経費、開催の時期(シーズン)といった問題を加味して、過去のデータを加工し、最終的な目標入場者数を試算している。

4. 海外交流展 0回

5. 地方巡回展 0回(平成12年度実績: 0回 0人)

6. 国立美術館巡回展(平成12年度実績: 4回 23,918人)
1回 8,309人

7. 展覧会開催経費 予算額 180,207,000円 決算額 413,745,608円

8. 特記事項

常設展については、それが美術館の活動の中核であるという認識のもとに、別項(「常設展」自己点検評価)に記すように、恒常的展示の中にさまざまなテーマ展示を盛り込み、また開館50周年記念の「コレクションのあゆみ」展では、当館のコレクションの特色を跡づけるとともに、小カタログを発行、ポスター、チラシほかによって普及にも努めた。また、江戸開府400年記念事業で都内の国公立の美術館、博物館等、31館の常設展等に入場できる「東京ミュージアムぐるっとパス」に参加した。

当館本館の企画展の目的はさまざまな美術作品をみて楽しんでもらうことはもちろんであるが、それと同時に近・現代の日本美術について単に流れや現状を知ってもらう以上の、より深い知識と理解を得てもらうことにある。そのためには近代日本の美術や、これと深い関係にある海外の美術潮流をきめこまかに取り上げ、さらに戦後以降、現代にいたる国内外の美術の動向を適宜に紹介してゆくことが必要である。また近代美術の見方は繰り返し見直しをかけてゆく必要があり、それらの活動全体によって日本の美術を真の意味で、国際的な場で相対的に位置付けてゆくことが可能になると考えている。

そうした観点から企画展については基本的に、①日本の近代美術において重要な役割を果たした作家の個展、主要な運動や傾向の展覧会、②海外の近代美術において重要な役割を果たした作家の個展、主要な運動や傾向の展覧会、③国内外を問わず戦後以降の美術に大きな役割を果たした作家、現在もなお活発に活動している作家の個展、主要な動きの展覧会、④国内外を問わず現代美術であらたな潮流をなしていると思われる若手を中心とする作家達のグループ展、⑤は④の中でその後も確実な実績を積んで、高い評価をえている中堅の作家の個展に分け、これを5年の中期計画の枠内にバランスよく配置することで、多くの人達のさまざまなニーズに応えつつ、当初の目的を達成するような計画をたてている。

今年度の企画展は昨年度の「未完の世紀」で20世紀美術全体を見渡した後を受けて、①の点で「青木繁と近代のロマンティズム展」、②の点で「カンディンスキー展」、③の点で「小倉遊亀展」、④の点で「写真の現在 サイトー 場所と光景 展」、「現代美術への視点 連続と侵犯 展」、⑤の点で「ヴォルフガング・ライブ」展を開催した。青木展では青木繁と彼に地下水脈でつながる村上華岳、関根正二といった画家たちの新たな美術史的な位置付けをはかり、カンディンスキー展では1987年での個展とあわせて彼の画業の全貌を明らかにすることができた。小倉展では、あらためてその近代美術史上の位置付けを試みた。またサイト展や連続と侵犯展では新しい現代美術の潮流を、ドイツの代表的な現代作家であるライブの展覧会では、当館グループ展以後、近年の充実した仕事振りを紹介した。

なお、昨年度の「公衆への観覧」の評価の際に指摘された諸問題のうち、1) 近代に限定せず、日本美術全体を見渡した展覧会、2) アジアや中南米の美術を紹介する展覧会の開催の2点に関しては、時間の流れや地域的なひろがりやを恣意的に限定することへの強い疑問が提出されたものと考えている。この点については、今中期計画中に琳派の流れとひろがりを目指す展覧会、ブラジルの近・現代美術を紹介する展覧会の開催を予定しているが、今後とも留意して計画を立案する。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館

- ①本館が50周年を迎えることを踏まえて美術館の歴史とコレクションの形勢をたどる展覧会など時機にかなった展覧会を企画した。
- ②また、常設展に特集展示のコーナーを設け、これまでの研究成果の発表の場とするとともに、来館者にとって魅力のある展示となるように努力した。
- ③その際、時に常設展と企画展の一体的な効果を狙って企画展にあわせた特集を所蔵品展示で行うこともあり、やや別の角度から企画展の内容を補完することで来館者の一層の理解を深めることに配慮した。
- ④企画展のうち4本については、国内外の他美術館と緊密な連携のもとに実施することができた。これによって展覧会が質的に向上し、美術館相互の新たな協力関係が生まれたことは当館にとっても大きなメリットがあり、今後とも機会があればこうした取組みを積極的に進めていきたい。

工芸館

- ①本年も工芸館常設展の基本計画である、1. 歴史展示、2. 名品展示、3. テーマ展示を行うことができた。テーマ展示では、松田権六を図案制作というこれまでとは異なった視点から見直すことによって、作品の理解を一層進めることができた。
- ②企画展では、これまであまり扱うことのなかったテーマ、1. 昭和の桃山復興、2. ドイツ工作連盟という二つの展覧会を開催した。それぞれ日本の工芸の近代化、モダンデザインの形成過程の重要なテーマであり、日頃の研究成果に基づく有意義な展覧会となった。
- ③松田権六、「昭和の桃山復興」展の荒川豊蔵、北大路魯山人などの作家は著名な作家であり、彼らの作品を数多く展示し、その新しい視点を提供し、来館者の一層の理解を深めることに配慮した。
- ④「ドイツ工作連盟」展ではモダンデザイン形成期のデザイン作品を展示し、理解を深めるよう配慮した。

【見直し又は改善を要する点】

本館：今年度の入館者数は目標人数をかなり上回ったが、それでも常設展の全体に占める比率、あるいは現代美術や写真の展覧会の入館者数が他に比べてかなり低いことは明らかであり、今後作品理解に資するためのビデオの作成、説明資料の一層の工夫、広報の充実を図っていきたいと考えている。

工芸館：総入館者数は目標数を11,655人上回っているにもかかわらず、常設展の入館者数は目標数を565人下回った。交通広告を中心に、広報活動の充実し、入館者の増加を図りたい。

なお、本館、工芸館を通じて常設展が美術館活動の中核となるべきであり、この点については、中長期的展望に立って今後の在り方を検討していきたい。

*添付資料

- ① 入館者数の推移（定量的数値推移一覧表 p.4）
- ② 入場料収入の推移（定量的数値推移一覧表 p.7）

本館

「常設展」

〇方針

当館の常設展は、近代日本美術の歴史的展開を系統的に展観することを主要な目的としているが、とはいえ、それは、同じ作品が常に定位置に展示されているという意味での「常設」展示を意味するものではない。増改築によって常設展示場は約3,000㎡に拡張されたとはいえ、一時に展示できる作品数は250～300点（おおむね1作家1作品）程度であり、したがって各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちつつ、会期ごとに展示作品のかなり部分（日本画・版画・写真はすべて）を入れ替えながら、各作家および時代の多面的な相貌を幅広く鑑賞できるように努めている。

〇実績

1. 開会期間

- ①常設展「近代日本の美術」平成14年3月26日～平成14年5月26日（54日間/うち平成14年度48日間）
- ②常設展「近代日本の美術」平成14年5月30日～平成14年8月4日（58日間）
- ③常設展「近代日本の美術」平成14年8月9日～平成14年10月6日（51日間）
- ④開館50周年記念 コレクションのあゆみ 平成14年10月12日～平成14年12月23日（63日間）
- ⑤常設展「近代日本の美術」平成15年1月8日～平成15年3月9日（53日間）
- ⑥常設展「近代日本の美術」平成15年3月14日～平成15年5月11日（52日間/うち平成14年度15日間）

計288日間

（所蔵品展のみの開催期間57日間）

2. 会場 本館 2階～4階

3. 出品点数

- ① 303件（うち重要文化財 3件）
 - ② 250件（うち重要文化財 2件）
 - ③ 213件（うち重要文化財 3件）
 - ④ 292件（うち重要文化財 8件）
 - ⑤ 250件（うち重要文化財 2件）
 - ⑥ 224件（うち重要文化財 2件）
- 延1,532件（うち重要文化財20件）

4. 入館者数

134,317人（うち常設展のみの入館者数 43,514人）（常設展目標入場者数 29,000人）

5. 入場料金

一般420円 学生130円 一般(団体)210円 学生(団体)70円

6. 入場料収入（常設展のみの入場料収入 6,572,700円）（目標入場料収入 5,998,000円）

7. アンケート調査

（1）本館

- ①調査期間 平成15年3月20日～平成15年3月23日（4日間）
- ②調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間） ※夜間開館1時間
- ③アンケート回収数 119件（母集団 41,731人）
- ④アンケート結果 ・良い 73.1%（87件） ・普通 22.7%（27件） ・悪い 4.2%（5件）

8. 特記事項

常設展は、出品点数や内容面の充実にもかかわらず、特別展・企画展と同等の入場者数を見込めないのが現状で

ある。今年度は、「開館50周年記念 コレクションのあゆみ」展においてポスター、チラシの配布を行ない、一定の成果を収めたが、今後は、各種メディアへの働きかけやホームページの活用方法等を含めて、常設展の魅力や効用について、広く一般の認知度を高めていく手立てを考えていきたい。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

常設展には、恒常性や安定性が求められる一方、各会期の展示に新鮮な要素を盛り込むこともまた、来館者に繰り返し足を運んでもらうためには重要と考える。そのため、4階にはテーマ展示のコーナーを、3階には版画コーナーおよび写真コーナーを設けて、常設展における変化の要因を鮮明にしたほか、2階の「ギャラリー4」と呼ばれる一室では、1階の特別展とも連動させつつ、「ヨーロッパと日本：1920-30年代の版画を中心に」「室内に描かれた人」「植物から考える」などのテーマ展示を行なった。

また、10-12月には、「開館50周年記念 コレクションのあゆみ」と題して、当館のコレクションの形成を、その時々 of 展覧会事業や時代背景をも念頭におきながら、多角的に見直す機会とし、小カATALOGを発行した。この展覧会は、ポスター、チラシを制作して記念展であることを明確に打ち出したことや、各種メディアに取り上げられたこともあって、入館者の点でも日頃の常設展をはるかに上まわる成果を見た。

【見直し又は改善を要する点】

特別展の展示・撤収のために1階展示場を閉めている期間も、上階の常設展示はできるだけ開催することを旨として展示替えのための全館休館期間をおおむね3日間（「コレクションのあゆみ」展に際しては5日間）として運営に当たったが、この日数では展示プランの作成・実行に制約が生じることが明らかになった。そのため、来年度からは、全館休館期間をおおむね4日間にして、運営に当たる予定である。

常設展の案内としては、『ギャラリー・ガイド 近代日本美術のあゆみ』を発行し、またフロアー・ガイドの配布や、会場内では時代解説パネルの掲示を行なっているが、来館者に対して、美術作品に親しむための過不足のない手引きを提供し、その多様な要望にいかに対応していくかは、今後の大きな課題と考える。

アンケート調査によると、来館者の「印象度」は全体として良好のようであるが、今後は、アンケート項目そのものの見直しをも含めて、その有効な活用法を検討していく必要がある。

「カンディンスキー」展（共催展）

〇方 針

当館では1987年に一度カンディンスキー展を開催しているが、ミュンヘン、モスクワ時代の展示については当時の社会情勢もあり、必ずしも十分なものにはならなかった。今回はカンディンスキー自身が自らの芸術の集大成と位置付けた「コンポジション」シリーズ、その頂点をなすエルミタージュ美術館所蔵の《コンポジションVI》、トレチャコフ美術館所蔵《コンポジションVII》を中心にロシア歴史美術館、プーシキン美術館、ロシアに散在する地方美術館の所蔵作品によってこの時期のカンディンスキーを集中的に紹介しようとした。

〇実 績

1. 開会期間 平成14年4月 1日～平成14年5月26日
(平成14年3月26日～平成14年5月26日)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 NHK, NHKプロモーション
後 援 ブリティッシュ・カウンシル
4. 出品点数 74件 (うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 104, 339人 (目標 98, 000人)
(110, 937人 (目標 110, 000人))
6. 入場料金 一般1300円 学生900円 一般(団体)950円 学生(団体)510円 一般(前売)1100円 学生(割引)800円
7. 入場料収入29,364,970円 (目標入場料収入20,270,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容 ロシア出身で20世紀絵画史上、最も重要な画家の1人であるワシリー・カンディンスキーの個展。ミュンヘンとモスクワを舞台に活躍していた1900年から1920年までの期間の作品で構成した。これらの作品はいずれも、その重要度にもかかわらず、旧ソ連内の美術館に所蔵され、従来国外へ出る機会のきわめて稀な作品である。
10. 講演会等 3回 参加人数388人 (詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告 (JR、営団の駅、車輛へのポスターの掲出)、美術館等へのポスター、チラシの配布、新聞、テレビ報道 (NHK「新日曜美術館」)
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
The Japan Times March 27, 2002 Kandinsky—Getting back to where it began (Victoria James)
新美術新聞社 2002年4月1日 「カンディンスキー展 スリリングな変貌 みなぎる力」 (中林和雄)
朝日新聞社 2002年4月4日 (夕刊) 「カンディンスキー展 抽象の道のりははじめの一步」 (神谷幸江)
東京新聞社 2002年4月6日 「抽象絵画に至る変化が一目瞭然 カンディンスキー展」 (中村隆夫)
The Daily Yomiuri April 11, 2002 Birth of the abstract—Kandinsky (Robert Reed)
毎日新聞社 2002年4月14日 「抽象絵画への軌跡 カンディンスキー展」
朝日新聞社 2002年4月16日 (夕刊) 「戦争の時代と共振、魂の躍動感 カンディンスキー展」 (田中三蔵)
毎日新聞社 2002年4月17日 (夕刊) 「よみがえるカンディンスキー」 (三田晴夫)
産経新聞社 2002年4月18日 「カンディンスキー 抽象絵画の地平切り開く」
The Asahi Shimbun April 21, 2002 Traveling home by an abstract route (C.B.Liddell)
カトリック新聞社 2002年4月21日 展評 カンディンスキー展 (金大偉)
読売新聞社 2002年4月25日 (夕刊) 「カンディンスキー展 時代や社会状況に呼応する魂の表現」 (菅)
信濃毎日新聞 2002年5月14日 「アート最前線 個展こそ展覧会の基本」 (建畠哲)
[特集 カンディンスキーと音楽]
カンディンスキーと音楽 (保坂健二郎)
カンディンスキーと架空音楽モデル (吉松隆)
現代の眼 533号 2002年 4-5月号 「カンディンスキーとスクリャービン」 (岡田敦子)
「ほかの惑星の空気—シェーンベルクとカンディンスキーにおける音楽と絵画樋口隆一」

13. アンケート調査 未調査

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

前回とあわせて、カンディンスキーのほぼ全貌を明らかにできたと考えている。特に《コンポジションⅥ》、《コンポジションⅦ》の2点が展示されたことは、今後よほどのことがない限り実現は困難と思われ、満足を感じている。また、今回についてはロシアのプーシキン美術館、トレチャコフ美術館、エルミタージュ美術館、ロシア歴史美術館から作品を借用できたこと、とりわけトレチャコフ美術館とは展覧会の運営そのものについて緊密な協力が得られたことは当館にとっては貴重な経験であり、今後もこの関係を維持発展していきたいと思っている。

【見直し又は改善を要する点】

前回のカンディンスキー展（昭和62年。147,996人、1日平均2,312人）に比べ、入場者数が総数、1日平均（2,157人）ともに下回っている点は反省している。15年前に比べ動員力が確実に落ちている中で、この数字をやむを得ないと指摘する意見もあるが、共催者が宣伝力の強いところであっただけに、この結果についてはあらためて検討する必要があると感じている。

「写真の現在2 サイトー場所と光景」(特別展)

〇方 針

本展は平成9年度に開催した「写真の現在ー距離の不在」展に続く「写真の現在」の第2回展として企画された。このシリーズは、注目すべき仕事を発表している中堅、若手の写真家を取り上げ、現代の写真表現の動向を探るものである。インターネットの普及などいわゆるIT技術の発展により、さまざまな画像に時と場所を問わずアクセス可能な状況が出現した今日、写真家がある場所(site)に身を置き、眼にした光景(sight)を記録し、そことは異なる時空において鑑賞されるという、写真をめぐる根本的な条件は、これまで以上に写真表現にとって重要な意味を持ちはじめているのではないか。そうした観点から今回は「サイト (site/sight)」をキーワードに8名の写真家の参加を得て、その新作・近作を紹介した。

〇実 績

1. 開会期間 平成14年6月18日～平成14年8月4日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 なし
協 力 ダイマクション、白石デザインオフィス、株式会社マグナム、日本油脂株式会社
協 賛 なし
4. 出品点数 238件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 9,140人(目標 8,000人)
6. 入場料金 一般630円 学生340円 一般(団体)510円 学生(団体)250円
7. 入場料収入 3,705,790円(目標入場料収入1,655,000円)
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容 日本の中堅、若手の写真家、伊藤義彦、勝又邦彦、兼子裕代、小林のりお、鈴木理策、野口里佳、港千尋、横澤典の8人の新作、近作によるグループ展。
10. 講演会等 1回 482人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告(鉄道駅へのポスター掲出)、美術館等へのポスター、チラシの配布、新聞、テレビ報道(NHK「新日曜美術館」)
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
朝日新聞社 2002年6月28日夕刊 「風景論」展 「サイトー場所と光景」展 「地名」希薄に体験伝える(大西若人)
Pen No.86 2002年7月1日 「8人の写真家が伝える、眼には見えないものの輪郭」(和田京子)
メトロポリス #434 2002年7月19日 Photography Today 2 Site/Sight (John McGee)
美術手帖 2 002年8月号 「写真のなかのサイトではない、写真のサイトへ」(杉田敦)
ブレーン9月号 vol.42 No.9 「鑑賞者の回路を開く写真の可能性」(上原裕子)
芸術新潮社 2002年9月号 「伊藤義彦の時間差パノラマ 『サイトー場所と光景』展より」(編集部)
京都造形大学学園通信 瓜生通信 2002年秋 第24号
「風景/場所(サイト)」(林洋子) 「鈴木理策をめぐって」(美術館)
読売新聞社 2002年12月12日 「2002回顧 写真 変化する視覚環境 ネット普及、流動するイメージ」(前田恭二)
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成14年7月31日～平成14年8月4日(5日間)
 - ②調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)*夜間開館1時間
 - ③アンケート回収 494件(母集団 9140人)
 - ④アンケート結果 ・良い64.4%(318件) ・普通29.7%(147件) ・悪い5.9%(29件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

もともと印刷媒体での発表という手段があり、インターネット上での写真家の作品発表も珍しいことではない今日、展覧会という形式での写真の提示については、展示空間での作品鑑賞体験を、他の方法では得られない質のものとして実現できるか否かが問われることになる。今回は展示空間の質を高めるため、各作家・作品に適した空間造りや照明を行うとともに、それぞれの展示空間相互の関係にも留意し、干渉しあうことなく連続していくよう心がけた。これは「サイト」をキーワードとした展覧会のテーマ自体とも関連することであり、新聞・美術雑誌等に掲載された展評等にも展示空間を評価するものもあり、本展の企画意図は理解をもって受け止められたと考える。

本館のリニューアルに伴い、フィルムセンター展示室から本館へと写真部門の拠点を移しての最初の写真展となった本展は、より広範囲な観客層に向けて、当館の写真部門の活動をアピールする機会でもあった。前回、フィルムセンターで開催した「写真の現在－距離の不在」展に比較して約3倍の入場者を得た、またアンケート調査でもおおよその好評を得られたことから、本展の目的について成果が得られたと考えている。

【見直し又は改善を要する点】

美術展に比較するとまだ入館者は少なく、写真というジャンルを扱っていく上で、企画内容、展示方法、作品紹介、広報のあり方等、一層の工夫と努力が必要であることが示された。

「小倉遊亀」展（共催展）

〇方 針

今回の展覧会は小倉遊亀の作品をそれが描かれた当時の美術だけでなく、社会の動向とも関連付けながらたどることと、その作風の形成過程と変遷を明確にし、そこで見出された揺るぎのない造形性が近代の日本美術にもつ意味をあらためて問おうとした。

〇実 績

1. 開会期間 平成14年8月20日～平成14年10月6日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 滋賀県立近代美術館、朝日新聞社
協 力 凸版印刷
協 賛 なし
4. 出品点数 84件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
*小倉遊亀展（東京会場、滋賀会場）全体では85点、1点は東京会場不出品
5. 入館者数 116,701人（目標 67,000人）
*当初、目標人数を出すに際して当館で開催した現代日本画のうち、「加山又造展」（112,005人、1日平均2,240人）と高山辰雄展（52,993人、1日平均1,359人）を参考にし、その平均値を目標とした。しかし、この9年の間で8回にわたる個展が東京を中心に開かれており、以前ほどの観客動員は難しいと想像されたこと、デパート展でもかなりの入場者があったとはいえ、そのほとんどが無料入場者であったことなどから、当初の計算からさらに2割程度削って目標人数を設定した。結果的には小倉遊亀の絵の支持層がかなり広範囲で固いものがあったこと、代表作である《小径》を前面にすえた交通広告、新聞やテレビ報道などが効果をあげ、予想外の入館者を迎えることになったと考えている。
6. 入場料金
一般1200円、学生900円、一般（団体）800円、学生（団体）600円、一般（前売）1,000円、学生（前売）800円
7. 入場料収入30,067,970円（目標入場料収入13,858,000円）
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容 近代的な造形感覚と豊かな生命力を感じさせる作風で、日本の近代美術史に確かな位置を占める小倉遊亀の回顧展。所属した再興院展への出品作を中心に初期から晩年までの作品を集め、4章に分けて構成した。
10. 講演会等 2回 270人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広 報 プレスリリースの発行、交通広告（京王線、JR、営団線の駅、車輛へのポスター掲出）、美術館等へのポスター、チラシの配布、新聞、テレビ報道（NHK「新日曜美術館」）
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
朝日新聞社 2002年8月13日 「小倉遊亀 人、花、こころ」（田中三蔵）
日本経済新聞社 2002年9月4日 「知、情、意備えた画風楽しむ 小倉遊亀展」（宝玉正彦）
サライ 2002年9月5日 「小倉遊亀 105歳まで『求道精進』」（菅谷淳夫）
東京新聞社 2002年9月14日 「小倉遊亀展 洞察力と普遍愛が投影」（草薙奈津子）
The Daily Yomiuri 2002年9月14日 A passion for art and perfection （Asami Nagai）
週刊朝日 2002年9月20日 「ココロの止まり木 女性像の変遷」（河合隼雄）
藝術百科 2002年10月20日 「小倉遊亀 眼に人のこころを映して」（高橋誠）
アート・トップ 2002年8月—9月号 「悠々と小倉遊亀展」（高橋誠）
メイプル 2002年10月号 「小倉遊亀さんが求め続けた『美しいもの』」（鈴木カオル）
ミセス 2002年10月号 「昭和を描いた女流日本画家『小倉遊亀展』」（高木陽子）
13. アンケート調査

- ①調査期間 平成14年10月3日～平成14年10月6日（4日間）
- ②調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）＊夜間開館1時間
- ③アンケート回収数 574件（母集団 116,701人）
- ④アンケート結果 ・良い92.7%（532件） ・普通6.4%（37件） ・悪い0.9%（5件）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今回の展覧会は小倉遊亀の作品を多数所蔵し、研究も進んでいる滋賀県立近代美術館と共同で組織した。蓄積された互いの情報、研究成果を交換することで、展示のみならずカタログ制作においても、これまで以上に十全な形で展覧会を開催できたと考えている。他館、とりわけ公立館と共同で展覧会を構成することは美術館相互の協力という意味でも重要であり、今後とも機会をみつけてこうした取組みを行っていきたい。また展示については、4章に分けて展示したことで画風の変遷がはっきりとし、非常にわかりやすかったという評価を受けている。

【悪かった点、改善を要する点】

予想されたことではあるが、会期最終日に近くなるとかなりの入館者で会場が混雑し、一部鑑賞しにくい部分もあったことは残念であった。鑑賞環境を考え、当初よりかなり余裕をもった会場構成を行ったつもりではあったが、今後に課題を残したと考えている。

「現代美術への視点 連続と侵犯」(特別展)

〇方 針

今日の美術の複雑化、多様化が進み、ともすれば判断基準を見失いかねない状況下、「つくること」「みせること」「コミュニケーション」といった美術の基本的な要素に立ち返りつつ、今日の美術がどのような形でこれまでの美術の歴史に接続し、またいかなる点でそこから飛躍しえるのかを探ろうとした。また、そのことを通して、美術と美術館の未来についてひとつの問題提起となることをめざした。

〇実 績

1. 開会期間 平成14年10月29日～平成14年12月23日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 なし
協 力 日本航空、中部電磁器工業株式会社
協 賛 株式会社資生堂
4. 出品点数 46件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 16,680人(目標 15,000人)
6. 入場料金
一般830円 学生450円 一般(団体)680円 学生(団体)330円 一般(前売)700円 学生(前売)350円
7. 入場料収入8,215,590円(目標入場料収入6,386,000円)
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容 美術史上の転換期としての現在を前向きにとらえて制作する、青木淳、キャンディス・ブレイツ、遠藤利克、ロラン・フレクスナー、ロニー・ホーン、ロン・ミュエク、中山ダイスケ、ジュリアン・オピー、高嶺巖の10作家の、絵画、ドローイング、立体、ビデオ、インスタレーションなど、さまざまな表現手段による作品で構成した。
10. 講演会等 8回 486人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広 報 プレスリリースの発行、交通広告(京王線、JR、営団線の駅へのポスター掲出)、美術館等へのポスター、チラシの配布、新聞、テレビ報道(NHK「新日曜美術館」)
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
The Daily Yomiuri 2002年11月14日 Challenging meaning in contemporary art (Annabel Wright)
朝日新聞社 2002年11月21日(夕刊)「制作か生活か 2つの粘土との格闘」(神谷幸江)
メトロポリス #453 2002年11月29日 A Perspective on Contemporary Art: Continuity and Transgression (John McGee)
artscape (web マガジン) 12月10日更新 「特集トピックス 美術展紹介:現代美術への視点 連続と侵犯」(村田真)
朝日新聞社 2002年12月13日 「『すき間』狙いは現代美術の十八番」(大西若人)
毎日中学生新聞社 2002年12月29日 「視覚、聴覚を刺激」(鈴木美穂)
エスクァイア日本版 Vol.17 2003年1月 「言語をアートの鍵に、世界の扉を開く。キャンディス・ブレイツ」(児島やよい)
美術手帖 2003年1月号 「テーマとアクチュアリティの葛藤—ゆらぐアイデンティティの時代」(小倉正史)
美術手帖 2003年1月号 「アーティストインタビュー 中山ダイスケ 夢のなかの羊を連れて」(編集部構成)
美術手帖 2003年2月号 「発表!編集者対抗 2002年回顧マイ・ベスト展覧会(男子女子自由形)」(Dr.BT)
13. アンケート調査
 - ①調査期間 平成14年11月13日～平成14年11月24日(11日間)
 - ②調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)*夜間開館1時間

③アンケート回収数 35 (母集団 16,680人)

④アンケート結果 ・良い71.4% (25件) ・普通14.3% (5件) ・悪い14.3% (5件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

既存の美術の枠組みを尊重しつつも、インスタレーション（現場設置）作品やビデオ作品などを多く含むことにより、今後美術に開かれていく様々な可能性の端緒を確認することができた。同時に普段、現代美術とはかかわりの薄い層の人々からも、理屈ぬきで面白いとの評価を多数得た。また、東京国立近代美術館の現代美術への積極的なかかわりの姿勢をアピールでき、美術関係者からも注目を集めた。

【見直し又は改善を要する点】

今回の企画の姿勢を、今後いかに継続し、展開していくかを検討する必要がある。とりわけ、音響作品やインスタレーションなど、いままでの絵画、彫刻といった展示作品とは大きく異なる形態の作品に対し、これ以後、展示、収蔵などの面で、どのような姿勢で対応していくかが課題として残された。

「ヴォルフガング・ライプ」展（企画展）

〇方 針

海外の現代作家の個展開催には、共催者を見出すことのむずかしさや、輸送経費の大きさなど諸種の困難が伴う。本展でも、必要不可欠な内容を、限られた展示空間の中でいかに分りやすく、コンパクトにまとめるかに留意して、作品選定や会場構成、カタログ編集に当たった。

〇実 績

1. 会期間 平成15年1月18日～平成15年3月9日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／財団法人ミモカ美術振興財団／東京ドイツ文化センター
構 成 ドイツ対外文化交流研究所
助 成 国際交流基金
4. 出品点数 17件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
5. 入館者数 18,867人（目標 12,000人）
ヴォルフガング・ライプは、当館開催の「色彩とモノクローム」展（1989年）に出品して以来、わが国でもたびたび紹介されてきたため、海外の現代作家の中では、一般の関心が高い彫刻家であること、また、主要新聞（読売・産経・朝日・毎日・日経・東京・中日・The Daily Yomiuri・The Asahi Shimbunなど）に展覧会評が掲載され、『芸術新潮』をはじめとする美術雑誌がインタビュー等の特集を組んだことなどが、入館者数の増加につながったと思われる。
6. 入場料金
一般（前売）530円、学生（前売）250円、一般（共通）700円、学生（共通）350円
一般（共通・団体）680円、学生（共通・団体）330円
7. 入場料収入9,239,160円（目標入場料収入2,482,000円）
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
20年以上の長きにわたって、現代のドイツを代表する彫刻家として国際的に活躍するW. ライプの、わが国の美術館では初めての本格的な回顧展である。
同展は、ドイツ対外文化交流研究所（シュトゥットガルト）が国際巡回展として組織し、同研究所の所蔵となった7点の作品を母体とし、作家と協議の上で、日本展のために追加された作品を合わせて構成された。出品作品17点は、『ミルク・ストーン』や花粉を用いた作品など、70年代半ばの初期作から、近年の蜜蠟による大がかりなインスタレーションまで、ライプのこれまでの作家活動をほぼ通覧できるよう配慮して選ばれた。
10. 講演会等 5回 376人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広 報 ポスター、チラシ等
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
『現代の眼』 2002年12月－2003年1月（第537号）9－11頁 「ヴォルフガング・ライプートートロジカルな強度」（三輪健仁）
中日新聞社 2003年1月11日（夕刊）「彫刻家ヴォルフガング・ライプ」（持田則子）
読売新聞社 2003年1月23日（夕刊）展覧会評（菅原教夫）
産経新聞社 2003年1月25日 展覧会評（深沢和彦）
朝日新聞社 2003年1月30日 「ヴォルフガング・ライプ展」（神谷幸江）
『月刊ギャラリー』 2003年2月号 42－47頁 ヴォルフガング・ライプ展〔インタビュー〕（神谷幸江）
『新美術新聞』 2003年2月1日（No.982）「ヴォルフガング・ライプ展」（松本透）
朝日新聞社 2003年2月4日（夕刊）展覧界評（大西若人）
Annabel Wright, “Wolfgang Laib and the art of immanence,” *The Daily Yomiuri*, February 6, 2003.

婦人公論 2月号 87頁 「ヴォルフガング・ライブ展」 (橋本麻里)

毎日新聞社 2003年2月12日(夕刊) 展覧会評 (石川健次)

日本海新聞社 2003年2月14日、南日本新聞社 2003年2月14日、神戸新聞社 2003年2月15日、下野新聞社 2003年2月16日、北日本新聞社 2003年2月17日、中国新聞社 2003年2月18日、展覧会評 (井出和子)

Kae Shigeno, "Digging deep brings light to the surface," *The Asahi Shimbun*, February 21, 2003.

東京新聞社 2003年3月1日 展覧会評 (中村隆夫)

赤旗 2003年3月2日 展覧会評 (山口泰三)

『芸術新潮』2003年3月号、86-90頁 ヴォルフガング・ライブ [インタビュー]、

『STUDIO VOICE』2003年3月号 「ヴォルフガング・ライブ展」 (倉林靖)

『BT』2003年4月号、25-32頁 「時を超えるものを見つめて」 ヴォルフガング・ライブ+鈴木理策(対談)

『インビテーション』2003年4月号、166頁 「ヴォルフガング・ライブ展」 (橋本麻里)

『装苑』2003年4月号、144頁 「ヴォルフガング・ライブ展」 (村田明久美)

13. アンケート調査

①調査期間 平成15年2月27日～平成15年3月2日(6日間)

②調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間) *夜間開館1時間

③アンケート回収数 226件(母集団 18,867人)

④アンケート結果 ・良い78.8%(178件) ・普通17.7%(40件) ・悪い3.5%(8件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

一貫して自然素材(牛乳・花粉・蜜蝋など)を用いて制作してきた、ライブの芸術の底に流れる自然観や芸術観に焦点を当てるべく、展覧会場の全体構成や雰囲気作りなども、作家との綿密な話し合いのもとに進めた。アンケートの「印象度」の回答等を見ても、この目標はほぼ達成されたようである。同展のカタログは、入館者約6人のうち1人が購入した(入館者数18,867人、カタログ販売数3,269冊)。

この高率は、同展が、入館者にライブや現代美術に対する一歩踏み込んだ関心が芽生えるきっかけとなった一つの印しとして評価することも可能ではないか、と考えている。

【見直し又は改善を要する点】

入館者の多くは、無料配布の作品解説(フロアー・ガイド)を参照しながら鑑賞していたようであるが、鑑賞の妨げにならない範囲でいかに的確な解説や案内を提供するかは、今後とも、新しい傾向の作品を取り上げる展覧会の課題と考えている。

「青木繁と近代日本のロマンティズム」展（共催展）

〇方 針

まずこの展覧会は、20年ぶりの青木繁回顧展として構成されるもので、青木繁の主要作品を網羅することを目指した。とともに、それに加えて、青木の精神的後継者とも言うべき作家、中村彝、村上華岳、村山槐多、関根正二ら19人の作品をあわせて展示し、青木に始まるもうひとつの日本近代美術史を示すことを試みた。特にこの19人と青木のつながりを考える際には、直接的な交友や師弟関係といった美術史上の結びつきにとらわれず、描かれたモチーフや表現方法など、作品自体の中に共通項を探ることを重視した。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年3月25日～平成15年3月31日
(平成15年3月25日～平成15年5月11日)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 日本経済新聞社
協 力
協 賛 三井不動産東レ
4. 出品点数 件(うち国宝 0件、重要文化財 8件)
5. 入館者数 4,000人(目標 6,000人)
(目標 42,000人)
6. 入場料金 一般 1200円、学生 900円、一般(団体) 800円、学生(団体) 600円、
一般(割引) 1100円、学生(割引) 850円、一般(前売) 1000円、学生(前売) 800円
7. 入場料収入861,990円(目標入場料収入1,241,000円)
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
20年ぶりの青木繁回顧展として、重要文化財《海の幸》《わだつみのいろこの宮》を含む青木の作品約77点を展示。加えて、その精神を受け継ぐ作家たち、中村彝、村上華岳、村山槐多、関根正二ら19人の作品68点を併せて展覧し、多様な視点から近代日本美術史における青木繁の位置付けを探った。「神話的渾沌から」「海のフオークロア」「生命礼賛」「恋愛あるいは永遠の女性」「古代の発見」「望郷あるいは晩帰」の6章で構成。
10. 講演会等 3回 参加人数 83人(4月11日現在1回のみ開催)
11. 広報
共催者の日本経済新聞社の協力で、外部に広報事務所を設け、プレスリリースの作成・発送、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、ポスターの駅貼り・車内吊等掲出、電飾看板掲出、記者内見会および記者発表の開催、チラシ配布、その他雑誌・新聞取材対応を行い、現在も継続中である。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
13. アンケート調査 平成15年度に実施

〇自己点検評価

平成15年度に行う。

工芸館

「常設展」

〇方 針

本館

当館の常設展は、近代日本美術の歴史的展開を系統的に展観することを主要な目的としているが、とはいえ、それは、同じ作品が常に定位置に展示されているという意味での「常設」展示を意味するものではない。増改築によって常設展示場は約3,000㎡に拡張されたとはいえ、一時に展示できる作品数は250～300点（おおむね1作家1作品）程度であり、したがって各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちつつ、会期ごとに展示作品のかなり部分（日本画・版画・写真はすべて）を入れ替えながら、各作家および時代の多面的な相貌を幅広く鑑賞できるように努めている。

工芸館

工芸館の常設展は、会場の広さの都合により、企画展開催を除く期間に行っている。所蔵する近代工芸・デザイン作品を中心に寄託作品を利用しつつ、1. 近代工芸・デザイン全般に関する歴史展示、2. 近代工芸・デザインの名品、3. 近代工芸・デザインに関するテーマ展示という、3つを柱に行っている。

〇実 績

1. 開会期間

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|--------|
| ①常設展「近代工芸とデザインの東西」 | 平成14年4月1日～平成14年4月14日 | (12日間) |
| ②常設展「近代日本の工芸 百年の歴史」 | 平成14年4月27日～平成14年6月30日 | (56日間) |
| ③常設展「モチーフでたどる近代工芸の名作」 | 平成14年7月9日～平成14年9月16日 | (61日間) |
| ④常設展「松田権六作品と図案」 | 平成14年11月30日～平成15年1月8日 | (26日間) |
| | | 計155日間 |
- (所蔵品展のみの開催期間155日間)

2. 会 場 工芸館 2階

3. 出品点数

- | | |
|-------|-------------------|
| 工芸館 ① | 122件 (うち重要文化財 0件) |
| ② | 107件 (うち重要文化財 0件) |
| ③ | 94件 (うち重要文化財 0件) |
| ④ | 87件 (うち重要文化財 0件) |
| 延 | 410件 (うち重要文化財 0件) |

4. 入館者数

21,435人 (常設展目標入場者数 22,000人)

5. 入場料金

一般420円 学生130円 一般(団体)210円 学生(団体)70円

6. 入場料収入 (常設展のみの入場料収入 4,533,080円) (目標入場料収入 3,163,000円)

7. アンケート調査

未調査

〇自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

歴史展示、植物・動物などのモチーフ別のわかりやすい名品展示、松田権六を新しい視点で見直したテーマ展示。14年度の常設展は、様々な切り口で、一般の方から研究者まで、幅広い観覧者のニーズに応えた。

【見直し又は改善を要する点】

工芸作品は素材・技法が重要な要素となっているため、その理解が表現内容と共に作品鑑賞の要の一つとなっている。それを個々の作品に即して解説するため、鑑賞カードを無料配布している。今後はそれを一層充実して、一層の理解を図るよう配慮したい。

「森正洋—陶磁器デザインの革新—展」（特別展）

〇方 針

日常の陶磁器デザインの先駆として国内外で高い評価を得てきた森正洋の作品を多様な観点に立って展示し、我が国プロダクト・デザインの発展の指標として現代デザインの優秀さを示すことに努めた。

〇実 績

1. 開会期間 平成14年6月28日～平成14年8月4日

2. 会 場 東京国立近代美術館本館2階 ギャラリー4

3. 主 催 東京国立近代美術館

4. 出品点数

85件（うち参考出品2件）

5. 入館者数 12,213人（目標 4,000人）

広報の成果とともに、時代性とニーズを的確に取り込み洗練させた森正洋の陶磁器デザインへの関心の高まりが多くの入館者数を記録することになったものと思われる。

6. 入場料金は、常設展の一部として常設展料金420円を徴収。

7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。

8. 担当した研究員数 3人

9. 展覧会の内容

日常の陶磁器デザインにより国内外で高い評価を得てきた森正洋の制作を、グッド・デザインのシンボルとなった醤油さしから和洋の食器セット、パーティトレイ、最新の少量多品種へのニーズを映す飯わんやポット・カップまで、多数展示した。展示に当たっては、作品を単に回顧的に取り上げるのではなく、時代に即した主題や個性的なデザイン思考を示した主題等によって構成を図り、機能的で簡潔なフォルム、優れて個性的かつ現代的なデザイン性等、森作品の特性を鑑賞者に分かりやすく提示することに努めた。

10. 講演会等 3回 250人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）

11. 広報

新聞・テレビ等の報道機関、美術・工芸系やデザイン系の雑誌、婦人雑誌、またインターネット等で様々な媒体を活用して広報に努めた。また工芸系やデザイン系の大学、学会、デザインに関わる諸機関等への広報を積極的に行った。その成果は予想を大幅に上回り、かつ広域からの来館が多数にのぼったこと等に表れていると思われる。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼 533号 2002年4-5月号 <展覧会予告>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」（諸山正則）

現代の眼 534号 2002年6-7月号 「森正洋の美学」（栄久庵憲司）

現代の眼 534号 2002年6-7月号 「産地から見た森正洋の仕事」（鈴木由紀夫）

読売新聞社 2002年6月25日 「身近な食器 息づく美 陶磁器デザイナー森正洋さん個展」

THE JAPAN TIMES 2002年6月26日 MASAHIRO MORI Bringing the tabletop into the gallery (Robert Yellin)

朝日新聞社 2002年6月27日 <美・博ピックアップ>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」

朝日新聞社 2002年7月16日 「無私の精神さわやか」 「正洋—陶磁器デザインの革新—展」

(四) : <単眼複眼>「森正洋の陶磁器デザイン展 こだわり続けた量産品の食器」（竹田博志）

陶業時報 2002年7月25日 「用と美を備えたモダン器 森正洋・陶磁器デザインの革新」

Design News 第259号 2002年秋 <特集 森正洋のデザインに学ぶ>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」展（東京国立近代美術館）より（秋元淳）展評

CONFORT 2002年10月 「『革新』の意味するもの 森正洋—陶磁器デザインの革新—」（山本雅也）

新美術新聞 2002年7月11日号、月刊タイトル 2002年6月、日経デザイン 2002年7月、カーサブルータ

ス 2002年7月、書道界 2002年7月、グラス・アンド・アート 第24号、エル・デコ 2002年8月

「森正洋—陶磁器デザインの革新—」展

Japan Design Net <デザインイベントエース>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」展

Japan Design Net <JDN レポート>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」展

やきもののネット <展覧会探訪>「森正洋—陶磁器デザインの革新—」展

13. アンケート調査

- ①調査期間 平成14年7月31日～平成14年8月4日（5日間）
- ②調査方法 記入方式
- ③アンケート回収数 663件（母集団12,213人）
- ④アンケート結果 ・良い81.0%（537件）・普通16.4%（109件）・悪い2.6%（17件）

○自己点検評価

現代において親しみと高い関心をもって注視される陶磁器デザインをとりあげることで、我が国の戦後のプロダクト・デザインが豊かに発展を遂げデザイナーがいかに時代性に優れて個性的な創作を企図してきたかを理解してもらえたように思われる。目標数をはるかに超える熱心な入館者があり、当館ショップでも森正洋デザインの陶磁器が多数の人々に歓迎されているかを見ることができた。

「昭和の桃山復興展」(特別展)

○方針

昭和初期の陶芸家たちによる桃山復興という現象を、「陶芸近代化の転換点」と捉え、桃山陶芸再現への取り組みによって陶芸家の作家意識がどのように変貌を遂げたかを探る。

○実績

1. 開会期間 平成14年9月28日～平成14年11月24日(50日間)
2. 会場 東京国立近代美術館 工芸館
3. 主催 東京国立近代美術館
4. 出品点数
113件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 11,374人(目標 10,000人)
6. 入場料金
一般630円 学生340円 一般(団体)510円 学生(団体)250円
7. 入場料収入4,402,190円(目標入場料収入2,963,000円)
8. 担当した研究員数 4人
9. 展覧会の内容
昭和初期の「桃山」再評価をきっかけとして桃山陶芸の再現に取り組み、それを拠り所にして近代的作家へと脱皮していった陶芸家の活動を紹介した。主な出品作家は、陶芸家の北大路魯山人、荒川豊蔵、金重陶陽、川喜田半泥子など8人であった。
10. 講演会等 ギャラリー・トーク 7回 282人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報
新聞・テレビ等の報道機関、美術・工芸系の雑誌、婦人雑誌、インターネット等で種々の媒体を活用して広報に努めた。また工芸系の大学、学会、工芸に関わる諸機関等、陶芸教室などへの広報を積極的に行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
山陽新聞社 2002年11月7日(朝刊)「東京国立近代美術館『昭和の桃山復興』展 金重陶陽の代表作も」
陶業時報 2002年10月25日「昭和の桃山復興 東京国立近代美術館で」
藝術公論 2002年11月 「昭和の桃山復興—陶芸近代化の転換点」
朝日新聞社 2002年10月24日(夕刊)「マリオン 美・博ピックアップ」
『陶磁郎』32号 2002年11月 「昭和の桃山復興—陶芸近代化の転換点」(木田拓也)
『淡交』第56巻第9号 2002年9月 「陶芸家たちの桃山復興」(木田拓也)
『炎芸術』72号 2002年11月 「『昭和の桃山復興』展開催にあたって」(木田拓也)
13. アンケート調査
①調査期間 平成14年11月21日～平成14年11月24日(4日間)
②調査方法 記入方式
③アンケート回収数 136件(母集団 11,374人)
④アンケート結果 ・良い84.6%(115件) ・普通15.4%(21件) ・悪い0%(0件)
14. 特記事項
ギャラリートークの日にあわせて仮設の茶席を設け、抹茶サービスを行い、好評を得た。

○自己点検評価

昭和における「桃山復興」という現象を時代の流れに沿って展示するように努めた。すなわち陶芸家たちの作家意識が変化している様子を、桃山作品の直摸から個性的な作品が生み出されるまでの作品を展示することによって示した。その点が鑑賞者にも分かりやすい展示となり、好評であった。また、北大路魯山人や荒川豊蔵らが所蔵していた桃山時代の陶磁器などをあわせて展示したことも、鑑賞者の関心を集めた。

しかし、これらの制作活動がその後の工芸界にいかなる影響を与えたか、こうした視点が今回の展覧会では示すことができなかった。またこの展覧会はより多くの入館者を迎えることが可能だったのではないかと思っている。それぞれより一層の研究が必要である。

「クッションから都市計画まで—ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相 1900—1927」(特別展)

〇方 針

20世紀初頭における近代デザインの動向を、バウハウスを金字塔とする従来の近代デザイン史の文脈から回顧するのではなく、ドイツ工作連盟の活動を中心にヘルマン・ムテジウスの言説から再構築することを目指した。このことは、近代デザインの発展を検証する上で新たな視点を加えることになると考える。

〇実 績

1. 開会期間 平成15年1月18日～平成15年3月9日
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館及び東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー2・3
3. 主 催 東京国立近代美術館／京都国立近代美術館
共 催 財団法人堂本印象記念近代美術振興財団
協 力 工作連盟資料館、ルフトハンザ カーゴ AG
後 援 東京ドイツ文化センター
協 賛 国際交流基金、(財)サントリー文化財団、財団法人ポーラ美術振興財団、(財)UFJ信託文化財団
4. 出品点数
209件
5. 入館者数 11,823人(目標9,000人)
6. 入場料金
一般630円 学生340円 一般(団体)510円 学生(団体)250円 一般(共通)830円 学生(共通)450
一般(共通・団体)680 学生(共通・団体)330円 一般(前売り)530円 学生(前売り)250円
7. 入場料収入2,949,070円(目標入場料収入1,314,000円)
8. 担当した研究員数 4人(うち1人は京都国立近代美術館研究官)
9. 展覧会の内容
20世紀初頭のドイツ近代デザインの動向をドイツ工作連盟の活動とその中心にあって活躍した建築家ヘルマン・ムテジウスの言説から再構築して、世紀末からバウハウス誕生に至る近代デザイン史を新たな視点で検証した。ドイツや日本で收藏されるプロダクト・デザイン製品、建築資料・都市計画模型、ポスター、図書刊行物資料等250件を展示した。京都国立近代美術館が企画した平成14年度交換展。
10. 講演会等 4回 200人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広 報
新聞、テレビ等の報道機関をはじめ美術雑誌や婦人雑誌、さらにデザイン系の専門誌等へ積極的な働きかけを行った。この結果、前年秋以降に京都国立近代美術館で開催していたにも関わらず多くの報道の機会を得た。当館のホームページでの紹介はもちろん、各ホームページ上での報知の問い合わせにも応じた。美術系、建築・デザイン系等の専門大学や専門学校等への広報にも努めた。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼 537号 2002-2003年12-1月号<展覧会予告>「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相」(諸山正則)
ギャラリー 2003年1月号／美術の窓 2003年2月号／NIKKEI DESIGN 2003年2月号／デザインの現場 2003年3月号／室内 2003年2月号／サライ 2003年2月20日号／ガイア 2003年2月号／イベント東京 2003年2月／STORY 2003年3月号／Design News 第261号 2003年春「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相」展
毎日新聞社(夕刊) 2003年2月17日 「風土とモダンを揺れ動く多様さ—『ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟』展に寄せて」(新見隆)
朝日新聞社 2003年2月13日 <美・博ピックアップ> 「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟」
Japan Design Net <デザインイベントエース> 「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デ

ザインの諸相」

eArt <展覧会情報詳細> 「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相」

13. アンケート調査

- ①調査期間 平成15年2月15日・平成15年2月20日～平成15年2月23日（5日間）
- ②調査方法 記入方式
- ③アンケート回収数 231件（母集団 11,823人）
- ④アンケート結果 ・良い63.2%（146件）・普通34.6%（80件）・悪い2.2%（5件）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

出品作品及び構成内容が専門性の高いものであったことから、広く一般の人々の来館を望むことは難しいのではないかと考えたが、研究者や専門の学生、デザイナーだけでなくより一般の入館者を多く迎えることができた。これにはギャラリーガイドの作成やギャラリー・トークの開催等が大きく寄与していると考えられる。また会場の展示面積の関係から400メートルほど離れた工芸館と本館とに分けられた。入館者には不便をかけることになったが、一方、展示に十分なスペースをとることができ、章立ての展覧会構成を会場のコーナーごとに明快に、より適当に配することができた。

【見直し又は改善を要する点】

今後は、より分かりやすい展示、点数を絞り込んだ展示など、入館者の利便をより考慮しなければならないと考える。

「今日の人形芸術 想念の造形展」(共催展)

〇方 針

展示の内容を2部構成とし、第1部で歴史的背景を、第2部では人形造形における今日的な視点を紹介した。時間軸による人形芸術の推移を展覧した昭和60年度開催の「人形工芸—昭和初期を中心として」を受け、今回の展覧会では水平軸によって人形をめぐる諸問題を検証することとした。様式や活動の場を越えた多彩な作風の国内作品を並べると同時に、チェコ、ドイツ、オランダからも6作家19作品を展示した。

〇実 績

1. 会期間 平成15年3月28日～平成15年3月31日
(平成15年3月28日～平成15年5月18日)
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 共 催 TBS、毎日新聞
協 力
協 賛
後 援 文化庁
4. 出品点数
101件(うち国宝0件、重要文化財0件)
5. 入館者数 1,245人(目標2,000人)
((目標16,000人))
6. 入場料金
一般800円 学生650円 一般(団体)700円 学生(団体)550円
7. 入場料収入201,670円(目標入場料収入292,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
近代以降、自律した造形芸術の領域において創作されるようになった人形芸術について検証した。第1部として昭和初期に高まった人形創作熱の動向を、第2部では現在活躍する作家の多様な作品を取り上げ、人形芸術の可能性を探った。25作家101点で構成した。
10. 講演会等 1回 103人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
(会期中、ギャラリートークを7回予定)
11. 広 報
プレスリリース発送
ポスター・チラシ等発送 704件
交通広告 8件(4日～1ヶ月)
雑誌等の掲載記事(54件/4月4日まで)
TBSスポット番組(3月11日から連日)
テレビ放送による展覧会紹介(2003年4月中2件)
毎日新聞特集記事(2003年3月21日、22日、28日、さらに4月中に6回予定)
12. 広報
新聞、テレビ等の報道機関をはじめ美術雑誌や婦人雑誌、さらにカルチャーセンター、人形教室等への積極的な働きかけを行った。また、共催者であるTBSにおいて定期的にスポットCMを流したり、情報番組等とのタイアップ、さらに毎日新聞紙上にて大きな広告面をもつなど、情報周知の徹底を図った。またHP上にてギャラリートークの様子やトピックス等の項を設けて頻繁に更新を行っている。この結果、人形作家や一部の愛好グループに留まらず、児童や若者など幅広い客層に対してアピールすることができた。
13. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

Vスポット、TBS、3月11日～

毎日新聞社 3月22日（朝刊） 「今日の人形芸術展—創作人形の魅力が満載」

毎日新聞社 3月28日（夕刊） 「今日の人形芸術展」

週刊文春 2月27日号／婦人画報 3月号／白い国の詩 3月号／アレツツ 3月号／APPLE 4月号／

VOGUE NIPPON 4月号／ミセス 4月号 「今日の人形芸術展」

14. アンケート調査 平成15年度に実施する。

○自己点検評価

平成15年度に行う。

国立博物館・美術館巡回展

「日本人の風景表現」展

○方針

展覧会テーマの設定や、全体の構成等に関しては、受入れ館と十分に話し合い、その要望をできるだけ生かす形で組織された。

○実績

1. 開会期間 平成15年1月4日～平成15年2月16日（44日間）
2. 会場 岡崎市美術博物館
3. 主催 岡崎市
独立行政法人国立博物館 東京国立博物館
独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館
中日新聞社
- 後援 愛知県教育委員会
4. 出品点数 57件（うち重要文化財7件）
5. 入館者数 8,309人
国立美術館全体としては2回12,753人（平成12年度実績：2回 11,959人）
6. 入場料金 大人 800円
小人 400円
7. 決算額 入場料収入 4,583,120円
図録販売 631,350円
合計 5,214,470円
8. 担当した研究員数 企画 2人（東京国立近代美術館の者、以下同）
展示・撤収 2人
図録執筆 8人
9. 展覧会の内容
わが国の絵画・版画・工芸等に現われる風物や風景表現を糸口にして、私たちの自然観や宗教観に光を当てようという主旨の展覧会である。平安から昭和にいたる美術の流れを念頭におきながら、全体を「彼岸の風景」「物語の風景」「胸中の山水」「都市の風景」「理想としての農村」「富士山」「変貌する東京」「異次元の風景」の8つのパートに分け、絵画を中心に、工芸を含む57点を展示した。
10. 講演会等 0回 0人
11. 広報 ポスター、チラシ、新聞広告
12. アンケート調査
 - ①調査期間 平成15年1月4日～平成15年2月16日（44日間）
 - ②調査方法 記入方式
 - ③アンケート回収数 93件（母集団 8,309人）
 - ④アンケート結果 ・大変良い41%（38件）・良い46%（43件）・まあまあ8%（7件）・良くない5%（5件）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

国立美術館3館、国立博物館3館からの出品作品を東京国立近代美術館と東京国立博物館が取りまとめる形で、ほぼ上記「方針」に沿ってテーマ性の高い展覧会を実施することができた。また、近代以前と以後の連続と断絶の両面を示しえたことも、成果の一つと考えている。

【計画を達成するために障害となっている点】

予算削減等の事情により、当初予定されていた館での開催が不可能となり、本展は単館開催となった。なお、「風景表現」といったテーマを設定した場合、出品作品は絵画中心とならざるを得ず、複数館での巡回展を組織するに当たっては、展示替え等を含めて、かなりの調整が必要である。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

○実績

貸与・特別観覧の件数

(1) 本館

貸与 119件

特別観覧 164件

(2) 工芸館

貸与 68件

特別観覧 27件

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

本館：休館中の平成12、13年度に比べ、今年度は貸与件数が増加していることは、美術館活動の充実に役立って喜ばしいことと考える。

特別観覧の件数の推移については増加傾向にあるが、画集等の単行本が主流であった時代に比べ雑誌新聞等、美術作品が紹介される媒体が幅広くなったことが背景にあると思われる。

工芸館：平成14年度に比べて申請件数は増加した。この理由は当館の収集作品が広く知られるようになってきたためであると思われる。また、専門家や学生に対して熟覧の機会を積極的に提供し、工芸館の収集作品に親しんでもらうと同時に、それを広報活動の一環としても捉えて展開した。

【見直し又は改善を要する点】

本館：貸し出しについては、作品の状態、常設展での使用頻度、巡回先の数などを考慮し、作品の保全に配慮する必要があると考える。

又、特別観覧一般の人達が美術に触れる機会が多くなったことは良いことであるが、許可にあたって極端な営利主義に走っている出版物にどのように対応するかは課題と考える。

工芸館：今後は、貸与、特別観覧とも、単に希望者側のニーズにこたえるのみでなく、工芸館の収集品、活動を広く知ってもらうものとしても位置付け、積極的に展開していくことが重要であるとする。

*添付資料

①貸与件数等の推移（定量的数値推移一覧表 p.8）

②特別観覧件数の推移（定量的数値推移一覧表 p.9）

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

- ① 収蔵品に関する調査研究
- ② 美術作品に関する調査研究
- ③ 収集・保管・展示に関する調査研究
- ④ 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
- ⑤ 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

〔本館〕

- ① 『東京国立近代美術館ギャラリーガイド 近代日本美術のあゆみ』（市川政憲他）
- ② 『コレクションのあゆみ 1952-2002』展カタログ（大谷省吾他）
- ③ 「北脇昇の『図式』 絵画について」（大谷省吾）
- ④ 「古賀春江《海》のモダンガール、再考」（大谷省吾）
- ⑤ 「鬨光《馬》をめぐって」（大谷省吾）
- ⑥ 「境界を描くこと—南薫造の《少女》における庭—」（保坂健二郎）
- ⑦ 「浴室の幾何学—近代日本の絵画にみるグリッドについて」（三輪健仁）
- ⑧ 「ディテールの誘惑—ベン・ニコルソン《静物—緑と茶》」（鈴木勝雄）
- ⑨ 「李禹煥の制作における『倫理』」（保坂健二郎）

〔工芸館〕

- ① 「色絵金銀彩染付飾皿「竹林月夜」について」（金子賢治）
- ② 「岩田藤七「ガラス飛文平茶碗」」（北村仁美）
- ③ 「縮緬地友禅訪問着「菊」」（今井陽子）
- ④ 「近代工芸の名作 ヘルマン・ムテジウス「音楽室椅子」」（諸山正則）
- ⑤ 「近代工芸の名作「平田郷陽「衣裳人形・長閑」」（木田拓也）

(2) 展覧会のための調査研究

〔本館〕

- ① カンディンスキーのロシア時代に関する研究（「カンディンスキー展」）
- ② 日本の現代写真におけるサイト（場所／光景）の問題に関する研究（「写真の現在2 サイトー場所と光景」展）
- ③ 小倉遊亀に関する研究（「小倉遊亀展」）
- ④ 現代美術における美術史への連続と侵犯に関する研究（「現代美術への視点 連続と侵犯」展）
- ⑤ ヴォルフガング・ライプに関する研究（「ヴォルフガング・ライプ」展）

〔工芸館〕

- ① 戦後プロダクトデザインの成立と展開に関する研究（「森正洋」展）
- ② 近代工芸における桃山復興の諸相と影響についての研究（「昭和の桃山復興」展）
- ③ モダンデザインの黎明期に関する研究（「ドイツ工作連盟」展）
- ④ 近現代の人形芸術に関する研究（「今日の人形芸術」展）

(3) 科学研究費補助金による調査研究

「日本文化の多重構造—近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年-1980年」（本館）

(4) 保存・修理に関する調査研究

2. 客員研究員等の招聘実績（年度計画記載人数： 0人）

3. 調査研究費 予算額 132,058,000円 決算額 63,567,587円

4. 特記事項

館の調査研究活動は①所蔵品の調査研究、②展覧会のための調査研究が中心である。基本的には少数の学芸員によって行われる、より広範囲な問題を含むテーマについては③科学研究費補助金を申請し、他機関の研究員を含むより大きな体制で臨んでいる。ともに美術館活動の基盤を成すものとして欠くことができないものであり、その成果は展覧会活動、出版物、報告書等で随時発表している。また、④として客員研究員を必要に応じて、随時依頼している。

今年度の実績については上記のとおりで、収集品や展覧会についての調査は当初の目的をほぼ達成したと考えている。また、科学研究費補助金による日本文化の多重構造—近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年-1980年」は全体を6部門にわけて研究を進めており、今年度はそれぞれ基礎的な資料の蓄積に努めた。その成果は一部、「青木繁と近代日本のロマンティズム」展で発表した。最終的には再来年度の報告書で公表する予定である。客員研究員については、工芸課において近代工芸、特に工芸館で開催する展覧会とコレクションに関する調査研究を行うために招聘した。

なお、保存修理に関する調査研究は、当館に保存修理の部門がなく特段のことは実施していないが、修理にあたって外部の専門家と十分な打ち合わせを行い、修理完了後には修理報告書の提出を求めて知識の習得に努め、修理を行うかどうかの判断の助けとしている。

昨年度の評価において成果を学会等で発表すべきという指摘については、美術館学芸員の場合、研究の成果は展覧会、あるいはカタログの形で多く発表されることは否めない。近年では個人レベルで学会発表するケースも少しずつみられるようになっており、今後とも積極的に努力するよう考えている。また、美術館今年度ロシア国内の美術館や、滋賀県立近代美術館、石橋美術館と展覧会の準備段階で共同で調査研究を進めたが、非常に有益であり、今後ともこうした取組みは続けていきたい。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：収集品の調査研究については、その成果は常設展のコンセプト、配列、構成に反映させるとともに、当館の広報紙（隔月発行）、多くは「現代の眼」、「紀要」上に発表されたが、一部はギャラリー4での特集という形で展示された。展覧会研究では、その成果をカタログに反映させた。今年度は「小倉遊亀展」、「青木繁と近代日本のロマンティズム展」で、それぞれ滋賀県立近代美術館、石橋財団石橋美術館と共同で調査研究を進めた。積極的な資料や情報交換が行われ、非常に有意義であった。今後も展覧会によっては、こうした形態の共同研究を進めたいと考えている。科学研究費による研究は、今年度から「日本文化の多重構造—近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年—1980年」というテーマで進められており、来年度も継続して行われる。成果については平成16年度に報告書の形で発表する予定である。

工芸館：美術雑誌、工芸関係誌などに、広報を兼ね所蔵作品の中からセレクトされた「名品紹介」をさまざまな視点から展開しているが、その中で自ら所蔵作品の研究がかつてなく進展している。展覧会研究はカタログに反映した。

4. 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キューレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

〇方 針

教育普及活動は美術館のもつ知識をさまざま形で提供することで、来館者に美術への関心と理解を高めてもらうとともに、より美術館を身近なものとして感じ、美術館の愛好者となってもらうことを大きな狙いとしている。そのため的手段、方法は種々考えられるが、対象となる層は子どもから大人まで、また美術館未経験者から専門家まで多岐にわたっており、それぞれに対してきめのこまかな対応をする必要がある。

特に、工芸館については、工芸作品鑑賞の特性を踏まえ、素材・技法、作品解説、作家のデータなど、多様な情報をできるだけ多種多様な媒体と機会を提供する必要がある外、会場で実際の作品を観ながら鑑賞と理解を深めるために、当館研究員の外、作家・館外研究者等によるギャラリートークを実施していきたい。

○実 績（総括表）

（１）－１ 資料の収集及び公開

本館

- ①収集件数 17,357件
- ②公開場所 本館アトライブラリ（本館2階）
- ③利用者数 1,027人
- ④貸出件数 2,159件（館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。）

工芸館

- ①収集件数 4,077件
- ②公開場所 工芸館図書閲覧室（工芸館1階）
- ③利用者数 89人
- ④貸出件数 208件（館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。）

（１）－２ 広報活動の状況

- ①刊行物による広報活動 7種 発行回数 6回
- ②ホームページによる広報活動

工芸館の展覧会情報ページにおいては、概要のほかにギャラリートークの様子や会場風景、トピックス等の画像を掲載するとともに用語解説やこども向けのページを設け、広く工芸作品鑑賞の普及に努めている。

- ③マスメディアの利用による広報活動

工芸館では、次の2誌に所蔵品を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図っている。

ア.「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』（発行：株式会社和光）

イ.「細部の真実 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』（発行：淡交社）

また、次の2誌に情報を提供し、各号で展覧会広報を行っている。

ア.「展覧会情報」『ICLUB』（発行：伊勢丹）

イ.「私だけが知っている人間国宝 泣きっ面 ふくれっ面 笑い声」『婦人画報』（発行：アシェット婦人画報社）

（１）－３ デジタル化の状況

本館

今年度にデジタル化した美術作品の件数 1,658件

工芸館

今年度にデジタル化した美術作品の件数 282件

（２）－１ 児童生徒を対象とした事業

児童生徒を対象にした事業としては、申し込みに基づく随時の講演会、ギャラリー・トーク、職場見学の受入れ等を行っている。今年度受入れ実績の詳細は、小中高校生に関しては「（２）児童生徒を対象とした事業」を、また大学生に関しては「（６）大学等との連携」を参照のこと。

本館

- ① 小学校： 3件（121人）
中学校： 6件（366人）
高校： 1件（14人）
（参考）大学： 5件（66人）
（参考）小中高校の教員の研究会： 5件

- ② ホームページ内に「こどものページ」を設けている。

工芸館

- ① 中学校：1件（5人）

(参考) 大学：3件 (94人)

(参考) 高校の教員の研究会：1件

② ホームページ内に「こども工芸館」を設けている。

(2) - 2 講演会等の事業 (詳細は別添資料参照。)

本館

①講演会	14回	1,399人
②ギャラリー・トーク	15回	603人
③パフォーマンス	0回	0人

工芸館

①講演会	0回	0人
②ギャラリー・トーク	22回	950人
③パフォーマンス	0回	0人

(3) - 1 研修の取組

本館

国立美術館上級キュレータ研修生の受け入れ。

工芸館

なし

(3) - 2 大学等との連携

本館

博物館実習生の受け入れ 平成14年7月29日～平成14年8月2日 (5日間) (8人)

工芸館

博物館実習生の受け入れ 平成14年8月22日～平成14年8月28日 (5日間) (4人)

講演会の派遣 平成14年11月19日 「昭和の桃山復興」展について (多摩美術大学にて) (陶芸専攻40名)

校外授業として熟覧を実施 平成14年12月12日 (武蔵野美術大学芸術文化学科14名)

校外授業として館内見学 平成15年3月9日 (武蔵野美術大学通信教育課程 ミューゼオロジーI 受講生41名)

毎年1回博物館実習生の受け入れを行っている。美術大学等と協力関係を結び、個別にギャラリートークや熟覧等の機会を設けるとともに、授業の一環として工芸館での作品観賞の時間を設定している。今後は美術大学で制作を学ぶ大学院生や助手、教員等の協力を得て、アーティストトーク等を所蔵作品展期館内に設ける予定である。

(3) - 3 ボランティアの活用状況 (登録の人数を含め記載する。)

本館

登録人数 20名 (平成15年5月10日の研修終了後、正式に登録。)

工芸館

12名 (昭和の桃山復興展時のみ)

工芸館では平成16年度から展覧会での解説および触知による作品鑑賞補助のためのボランティア導入を予定している。本年は、ボランティア導入実施について、特に平成15年度から開始する募集・教育について検討し、準備を進めた。

(4) 渉外活動

展覧会において各企業から協賛、協力を得たほか、国際交流基金、ブリティッシュ・カウンシルからの助成を受けた。(「(10) 渉外活動」参照)

(5) 友の会活動

友の会はない。

(6) 教育普及経費 予算額 62,394,000円 決算額 147,556,280円

(7) 特記事項

教育普及事業は来館者の増加ばかりでなく、その理解を少しでも手助けし、美術館に親しんでもらうことを目的としている。そのために当館では、①資料の収集と公開、②各種事業による美術館教育、③美術館活動についての広報、④学芸員、学芸員養成のための研修、⑤美術館を支援する組織の開拓と運営を大きな柱にさまざまな事業を考えている。①はライブラリの設置と情報のインターネット上での公開、②は講演会やギャラリートークの実施、ビデオ等の映像資料の制作、学校との連携による子供向けの美術館教育、③は「現代の眼」、年間カレンダーの発行、ホームページの制作、④は学芸員実務者研修、博物館実習、⑤はボランティアの募集とギャラリートークの実施、企業との連携が主なものである。

今年度はそのほとんどについて当初の目的を達成したと考えているが、①ではライブラリの利用率が低いこと、画像情報の公開が著作権の問題で十分に進まないこと、②では連続講座が実施できなかったこと、映像資料の制作ができなかったことなどの問題があった。連続講座は各展覧会での講演会をかなり増やしていることもあり、今後どのようにするか検討したいと考えている。映像資料は放映のシステムを新たにつくる必要があり、問題のある現在のビデオルームの位置と併せ平成15年度に検討する。

平成14年度の評価で指摘された②の学校教育との連携に関しては、現在においても可能な限り学校現場の要求に応えているが、今後ボランティアのガイド・スタッフの利用も含め、より組織化していく必要があると考えている。これまでに、子どものための鑑賞カードを作成をしたり、ホームページ上に「こどものページ」を設けたが、子どもたちの鑑賞教育については現場の教師、美術教育の専門家の意見も参考にしながら対応を模索していきたい。アートライブラリについては資料の一層の整備に努めるとともに、広報にも力を入れ、利用者の増加を図る必要があると考えている。資料の収集と公開については、今年度ホームページ上での図書検索を可能にした。また、従来から公開していた所蔵作品の文字情報に併せて、今後は著作権の切れた作品については画像情報を公開する方向で作業を進めている。作品のデジタル化はかなり進んでいるが、今後一層、進める必要がある。なお、独立法人国立美術館内の資料のネットワーク化については、今後他の3館との協議を進める。講演会等については、各展覧会ごとに講演会、ギャラリートークを行うことで来館者の展覧会への一層の理解を深める努力をしている。ホームページについては日本語版、英語版ともデザインの変更と内容の充実を検討している。ボランティアについては、平成15年度5月の一般来館者へのギャラリートークの開始目指し、募集と研修を行った。

○自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：今年度の展覧会では講演会、ギャラリートークに力をそそいだ。いずれの展覧会でも2回ないしは3回の講演会を開催するとともに、比較的混雑のない展覧会では15回におよぶギャラリートークを開催し、好評を得た。特に出品作家自身のトークは人気があった。また、新規の事業として、平成15年度5月からのボランティアによるギャラリー・ガイドの導入を目指して準備作業に入った。

工芸館：ギャラリートークを当初の計画よりもかなり増やすとともに、内容も、館外の研究者や作家などによって多様化するよう試みた。また昨年に引き続き一般誌2誌において工芸館の活動並びに近現代の工芸作品を積極的に紹介し、その普及の推進に努めた外、今年度は新たに2誌に展覧会情報を定期的に掲載することとした。

「昭和の桃山復興」展開催期間中、都立九段高校茶道部の協力を得て、抹茶提供サービスを行った。また、本年度より開始した鑑賞カードの作成は、過去のアンケートによって収集したデータに基づくもので、作品についての知識や鑑賞を深めたいとする入館者の要望に応えたものである。カードには基礎データや鑑賞のポイントを表記することとした。これらはすべて次年度以降も継続の予定である。

【見直し又は改善を要する点】

本館、工芸館を通じて、映像による美術館や作品の紹介が少ない。特に、本館のビデオコーナーのソフトについては、民間等の外部の協力を得ることも視野に入れ体系的に整備する必要があると考えている。また、アートライブラリが十分に活用されていない面もあり、一層広報が必要だと考えている。また、友の会活動については、どのようにすれば友の会を美術館を援助してくれる団体に育てられるか難しい問題があり、今後検討する必要がある。

また、工芸館においては、次年度以降、これまでに築いた作家・研究者を含む館外関係者とのネットワークを活かし、講演会やシンポジウム、ワークショップなどより幅広い活動を計画していきたい。またボランティアに関しては、会場での解説だけでなく、工芸作品の触知による鑑賞を促すとともに、専門性の高い工芸の知識やみどころを一般鑑賞者にもわかりやすく伝えられるよう、独自の視点で実施すべく現在準備を進めている。

* 添付資料

教育普及一覧（定量的数値推移一覧表 p.10）

(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

○実 績

1. 収集

(1) 本館

件数 17,357件

(2) 工芸館

件数 4,077件

2. 公開

(1) 本館

①公開場所 アートライブラリ（本館2階）

②公開日数 189日間

③公開件数

・公開資料数 2,159件

・公開請求件数 422件

(2) 工芸館

①公開場所 工芸館図書閲覧室（工芸館1階）

②公開日数 157日

③公開件数

・公開資料数 208件

・公開請求件数 89件

○自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：本館アートライブラリは17,357件の図書・カタログ・雑誌を受け入れ、平成14年度末現在の蔵書総数は、79,964点の図書・カタログと2,808誌の雑誌となった。平成15年1月より、土曜日も開室して閲覧サービスの時間帯を拡大し、特にボランティア(ガイドスタッフ)の自己研修に役立てた。平成14年度中に行った資料の交換件数は、国内機関との間で265件、国外機関との間で208件であった。

また、平成15年1月、東京国立近代美術館全体の蔵書を検索できるOPAC（オンライン検索カタログ）をホームページに公開した。

工芸館：今年度より図書閲覧室を設け、利用者への情報提供の多様化を進めた。

資料の収集については、4,077件の図書・カタログ・雑誌を受け入れ、平成14年度末現在の蔵書総数は7,552点の図書・カタログと582誌の雑誌となった。また新規に図書閲覧室を設け、利用者への情報提供の多様化を進めた。開室に当たり、資料の収集の重点を基礎資料に置きその購入に努めた。一方で、作家の個展カタログやリーフレット等一般では入手し難い資料の収集にも注意を払っている。

【見直し又は改善を要する点】

本館：本館アートライブラリの年間利用者が1,027人であり、平成15年1月からの土曜開室に伴って、利用者数は若干増えてはいるものの、十分な広報がなされたとは言えず、引き続き、資料の収集整備と併せて、ホームページその他の媒体を活用しながら広報して、利用の促進に努める必要があると考える。学生の利用が利用者全体の約4分の1（254名）であり、美術系大学図書館等との連携も、今後の検討課題であると認識している。平成15年5月に閲覧室の開架書架を増設することによって、新着図書、特に近時の展覧会カタログ

グが閉架書庫から出納することなく、自由な閲覧が可能となる予定であり、これも利用の拡大につながるものと考えている。

工芸館：工芸・デザイン関係の書誌を体系的に収集している施設は国内でも稀有であり、研究者の注目はますます高まることと思われる。今後も継続して基礎資料の充実を図るとともに、次年度以降はグローバルな視点で工芸作品を捉えられるよう、海外作家や作品の図書資料収集にも力を入れていきたい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 広報誌名

(1) 美術館ニュース「現代の眼」

①発行年月日 偶数月発行（発行回数6回、発行部数6冊）（年度計画記載発行回数6回）

②料金 350円

③配布先 運営委員等、都道府県の中央図書館、大学附属図書館、都道府県渉外学習センター、研究機関等

④特記事項 今年度より本館・工芸館の特別展・企画展にあわせた特集を組み、展覧会の副読本ともなるような編集を心がけるとともに、会期にあわせた発売時期を設定し、来館者が鑑賞時に有効に活用できるように心がけた。

(2) カレンダー（展覧会予定表）

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数2回）

②料金 無償

③配布先 会場内配布、都内の小中学校等

(3) 年報

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 大学附属図書館・研究機関等

(4) ギャラリーガイド近代日本美術のあゆみ

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）

②料金 800円

③配布先 館内ミュージアムショップで販売

(5) 研究紀要

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 大学、研究機関等

(6) 概要

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 区内学校、研究機関等

(7) パンフレット（和文）

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 会場内配布、問い合わせへの対応

(8) パンフレット英文

①発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

②料金 無償

③配布先 会場内配布、問い合わせへの対応

(9) その他の広報

工芸館では、次の2誌に所蔵品を取り上げた連載を行っている。

ア. 「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』(発行: 株式会社和光)

その月の展覧出品作のなかから一点名品を選び、その見所、歴史的意義、作家のプロフィールなどを解説する。

イ. 「細部の真実 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』(発行: 淡交社)

工芸は細やかな素材に対する配慮と高度な技術によって作られている。この連載は所蔵作品の名から名品を一点選び、その写真と拡大写真を比較掲載し、細部の造りが以下に全体の印象と違うか、また細部がいかに作品全体を構成しているかを見ることによって、工芸の面白さを知ってもらう。

また、次の2誌に情報を提供し、各号で展覧会広報を行っている。

ア. 「展覧会情報」『ICLUB』(発行: 伊勢丹)

在日外国人に対する展覧会情報の提供。

イ. 「私だけが知っている人間国宝 泣きっ面 ふくれっ面 笑い声」『婦人画報』(発行: アシェット婦人画報社)

展覧会に出品している人間国宝のエピソードを親しい関係者から取材、紹介し、あわせて展覧会情報提供する。

(10) ホームページによる広報

ホームページ上の展覧会情報に会場風景、作品図版、各種トピック及び用語解説

(工芸作品) を掲載するほか講演会等イベント情報の充実を図っている。又、更新頻度を増やして閲覧者の興味をかきたてるとともに、インターネットにおける情報検索時の露出を高めるよう努めている。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

「現代の眼」については今年度より本館・工芸館の特別展・企画展にあわせた特集を組み、会期にあわせた発売時期を設定するとともに、展覧会の副読本ともなるような編集を心がけた。当該展覧会中には会場に置いて閲覧してもらうなど、来館者への積極的なアピールを心がけた。

また、工芸館では、昨年に引き続き一般誌2誌において工芸館の活動ならびに近現代の工芸作品についての理解を促すための普及活動に力を入れた。また、今年度は新たに2誌に展覧会情報を定期的に提供し、広報普及することができた。

【見直し又は改善を要する点】

「現代の眼」の編集の遅れから発行時期のずれが生じるケースがあった。これについては、来年度以降、年度当初に年間スケジュールを組み、これに基づく早めの原稿依頼・編集を心がけることで、改善していきたい。

また、工芸館では上記のような試みを今後も継続し、さらに一層工芸館の周知を徹底できるよう内容・媒体等を検討していきたい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化

(1) 本館

- ①今年度にデジタル化した美術作品の件数 1,658件
- ②平成14年度末収蔵作品数 8,964件
- ③平成14年度末デジタル化作品数 8,480件 (カラー: 2,920画像 白黒: 9,720画像)
- ④今後のデジタル化の対応 毎年 500件をデジタル化予定

(2) 工芸館

- ①今年度にデジタル化した美術作品の件数 282件
- ②平成14年度末収蔵作品数 2,391件
- ③平成14年度末デジタル化作品数 1,033件 (カラー: 1,200画像 白黒: 無し)
- ④今後のデジタル化の対応 毎年 200件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 204,514件 (平成12年度アクセス件数 129,602回)

3. デジタル化した情報の公開

(1) 本館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 5,051件 (館内: 4,975件 館外: 76件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 8,209件

(2) 工芸館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 34件 (館内: 18件 館外: 16件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 2,356件

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：本館美術作品のデータベース化は、基本文字データは新規受け入れ作品もあわせて全点について入力を完了させており、画像のデジタル化も、モノクロ画像を含めるとほぼ9割を超えて完了している。本館の3階会場内に情報コーナーを平成13年度に設置しているが、617名の著作権者の許諾を得ることにより、入館者向け端末での画像公開が飛躍的に拡大して、過半数の作品の画像が閲覧できるようになった。

工芸館：平成14年度までに引き続き、今年度も所蔵作品のデジタル化の推進に努めた。また、「こども工芸館」というページを設け、初等・中等教育では機会の少ない工芸作品の素材・技法等について学べるようにした。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ホームページでは、基本文字データのデータベース検索をシステムを公開しているが、デジタル画像については、著作権切れもしくは「とうきんびコレクション」に選定して特に許諾を得たものだけに限り公開しているにとどまっている。今後は、ホームページのデータベース検索システムにおいて、著作権の切れた作品について、画像を公開表示するように努める。

工芸館：画像および文字情報のデジタル化については今後も継続的に努力したい。また、展覧会情報や工芸の基礎知識、エッセイなど多様な情報をホームページ上で公開し、工芸館の周知のための工夫を重ねていきたい。

【計画を達成するために障害となっている点】

作品のデジタル化については、館内での公開については、おおむね目的を達しており、今後は残りの著作権の処理に努めていくこととするが、館外での公開については、著作権の問題が大きく、現在、文化庁をはじめ国全体で取り組んでいる状況であり、今後は、その動向を見極めつつ、国立博物館等とも連携しながら、前向きな対応を検討していきたい。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

○実績

本館、工芸館とも児童生徒を対象にした事業としては、申し込みに基づく随時の講演会、ギャラリー・トーク等、展覧会の内容や対象年齢に合わせたきめ細やかな対応を心がけている。児童生徒だけでなく、その指導者である教師からの要望に対してもできるだけ対応し、こちらからも積極的な働きかけを行って連携を強めている。

今年度の受け入れ実績の詳細は下記のとおりである。大学生に関しては「(6) 大学等との連携」を参照のこと。

(1) 本館

① 小学校： 3件（121人）

中学校： 6件（366人）

高校： 1件（14人）

（参考）小中高教員の研究会： 5件

開催場所： ギャラリー内、講堂、エントランスホール等

② ホームページ内に「こどものページ」を設け、当館の主な作品の図版、見方のヒントなどを掲載。児童生徒が感想の書き込みを行えるしくみとした。

③ 平成13年度まで開催してきた児童生徒を対象とした事業「鑑賞教室」は、今年度はボランティア（MOMAT

ガイ

ドスタッフ）事業開始のため休止した。

(2) 工芸館

① 中学校：1件（5人）

（参考）高校の教師の研究会：1件

② ホームページ内に「こども工芸館」を設け、作品鑑賞のポイント、素材・技法の特性などを画像入りでわかりやすく解説した。

③ 平成16年度からのボランティア導入に伴い、児童生徒を対象とした事業「鑑賞教室」の再開を目指し、現在準備を進めている。

○自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館及び工芸館では学年単位、クラス単位でのトークの要請、あるいは修学旅行等で予約を受けた中学生への解説などを可能な限り受けるなど、きめ細やかな対応に心がけた。

【見直し又は改善を要する点】

工芸館：本館及び工芸館を通じて学校教育関係者、社会教育関係者等の意見を聞きながら、今後の児童生徒を対象にした事業を検討する必要があると考える、なお、工芸においては初等中等教育における工芸作品の鑑賞は未だ後進の域にあるが、一方では伝統的な素材・技法による制作、さらに実際にもものに触れながらの学習への関心が高まっている。工芸館では、今後、ボランティアの導入に伴い、こうした意欲に対応するよう現在、様々な視点から検討しているところである。平成15年度は、今年度までに行った調査・準備を反映し、作家によるワークショップや児童生徒を対象としたワークシート作成等を計画している。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 講演会 14回 (年度計画記載回数: 13回)

(1) 本館 14回 (年度計画記載回数: 13回)

①開催期間 計14日

②開催場所 講堂

③参加者数 1,399人 1回平均99.9人 (平成12年度実績 183人)

*今年度、展覧会に合わせたギャラリートークを、頻繁に行った。学芸員だけでなく外部の人や出品作家にも行ってもらう、来館者との対話の場を設けた。

④担当した研究員数 各回 約3人 (講演者含む)

⑤事業内容 各展覧会の内容に合わせ、当館学芸員、作家自身、あるいは外部の専門家が作品の前で内容や、制作意図などについて解説した。

⑥アンケート結果 (回答数51件) ・良い82.3% (42件) ・普通15.7% (8件) ・悪い2.0% (1件)

(2) 工芸館 (年度計画記載回数: 0回)

2. ギャラリー・トーク

(1) 本館 15回 (年度計画記載回数: 19回)

①開催期間 計15日

②開催場所 企画展ギャラリーおよび所蔵品ギャラリー

③参加者数 603人 1回平均40人 (平成12年度実績 140人)

*今年度より展覧会にあわせた講演会・ギャラリー・トークを積極的に行い、出品作家や当館研究員、外部の専門家等と来館者の直接の対話の場を多く設けるよう心がけた。

④担当した研究員数 各回 約3人 (トーク講師含む)

⑤事業内容 各展覧会に合わせ、出品作家や当館研究員、外部の専門家等による講演を行った。

⑥アンケート結果 (回答数66件) ・とても良い39.5% (26件) ・良い41.5% (28件) ・普通14.5% (10件) ・あまり良くない0% (0件) ・良くない4.5% (2件)

(2) 工芸館 (年度計画記載回数: 4回)

①開催期間 平成14年5月～平成15年3月 (22日間)

②開催場所 展示会場 (工芸館及び本館ギャラリー4)

③参加者数 950人 (平成12年度実績 208人)

④担当した研究員数 延べ22人

⑤事業内容 ギャラリー・トーク

⑥アンケート結果 (回答数35件) ・良い85.7% (30件) ・普通11.4% (4件) ・悪い2.9% (1件)

特記事項

当館研究員によるトーク13回、館外研究者3回、作家6回

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：展覧会にあわせた講演会・ギャラリー・トークを従来以上に積極的に行い、出品作家や当館研究員、外部の専門家等と入館者との直接の対話の場を設け、入館者により深く展覧会を理解してもらうように心がけた。特に金曜日の夜間開館時には、夜間開館のアピールも兼ねて、重点的にスケジュールを組んだ。各回の参加者も予想を超えて多く、また館内の案内を徹底し、特に会場内でのトークの場合には内容にあわせて適宜椅子を用意するなど、対応にも気を配り、入館者の好評を得たものとする。

工芸館：本年はギャラリー・トークの回数を当初の計画よりもかなり増やし、また内容にも多様性を持たせるよう努めた。出品作家によるトークを目的として入館する利用者も多く、アンケート結果からもおおむね好評を得ている。

【見直し又は改善を要する点】

本館：会場内でトークを行う場合は、参加者以外の観覧を妨げない案内、通路の確保などの点をさらに検討していきたい。

工芸館：今後、これまでに築いた大学や作家等とのネットワークを生かしながら、できるだけ多くの機会と豊富な内容によるギャラリー・トークや講演会などの機会を増やしていく予定である。

また、鑑賞教室についても、ボランティアの導入に伴って実施し、年齢や予備知識の有無を問わない幅広い層の利用者が複雑な素材・技法による工芸作品への理解を深められるようにしたいと考えている。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

○実績

1. 学芸担当職員（キュレーター）研修

(1) キュレータ実務研修

- ①研修期間 51日間
- ②開催場所 東京国立近代美術館
- ③参加者数 1人（平成12年度実績 0人）
- ④担当した研究員数 3人
- ⑤事業内容

三重県美術館の学芸員田中善明を平成14年12月から15年5月まで受入れ、貴重図書や一般図書などの分類整理方法及著作権などの権利関係処理、日本近代洋画の描画技法、額の形状および修復処置方法について指導した。また、「青木繁と近代日本のロマンティズム展」の準備作業に参加させ、作品保存、会場施工について研修させた。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

企画課情報資料係と美術課絵画彫刻係が、協力して指導に当たった。また、「青木繁と近代日本のロマンティズム展」では会場用のキャプション、パネルの制作、陳列時の作品点検等、実務に携わらせた。図書整理、修復処置などの課題を身につけることを狙いとした研修は、おおむね成果を挙げたと考えている。

【見直し又は改善を要する点】

この研修では三重県立美術館の都合で間をあけて2週間づつ、2ヶ月の演習であったために、展覧会のカタログ制作など連続性のある程度要求される作業には参加できなかった。今後の検討課題となった。

(3) - 2 大学等との連携

○実績

1. 博物館実習生

(1) 本館

- ① 受入期間 平成14年7月29日～平成14年8月2日（5日間）
- ② 開催場所 本館（会議室・アトライブラリ・所蔵品ギャラリー）
- ③ 参加者数 8人（平成13年度実績0人）（平成13年度は工事休館中のため実習受入れを休止）
- ④ 担当した研究員数 10人（受入れ担当1、講義等9）
- ⑤ 事業内容 講義・館内見学・ギャラリー・トーク実施・展覧会案立案など。
- ⑥ 特記事項 「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設定。

(2) 工芸館

- ① 受入期間 平成14年8月22日～平成14年8月28日（5日間）
- ② 開催場所 工芸館（会議室）
- ③ 参加者数（平成13年度実績4人）
- ④ 担当した研究員数 6人
- ⑤ 事業内容 講義、館内見学、ギャラリートーク実施、作品取り扱いなど。

2. その他の連携・協力

(1) 工芸館

- ① 館外への講演会の派遣 1件
平成14年11月19日 「昭和の桃山復興」展について（多摩美術大学にて）（陶芸専攻40名）
- ② 校外授業として作品熟覧 1件
平成14年12月12日（武蔵野美術大学芸術文化学科14名）
- ③ 校外授業として展覧会見学 1件
平成15年3月9日（武蔵野美術大学通信教育課程 ミューゼオロジーI 受講生41名）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：今年度は、講義、館内見学等により美術館の仕事の全体像を伝えるとともに、特に「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設け、各学生がギャラリー・トークを行ったり、グループで展覧会案を立てたり等の研修計画を立てた。これにより、各学生には実習に主体的にかかわってもらうこと、作品と来館者をつなぐという美術館の重要な役割を実践的に学んでもらうことができたと思う。学生の満足度も高く、一定の成功を収めたと考える。

工芸館：参加者には、大学で得た知識をもとに、実際の美術館活動についての学習を促した。特に、作品に触れるさせたことで作品の取り扱いの技術の習得と、複雑な素材・技法から成り立っている工芸作品の理解を深めることにも結びついたようである。また、一般の鑑賞者を対象にして行ったギャラリートークの実習では、日頃の研究とはまた異なった視点での作品の解釈と、それを他人に伝えるために求められる知識と技術を得る上で意義があったと考えている。

【見直し又は改善を要する点】

本館：的を絞ったカリキュラムを組んだため、日程の関係で、美術館の仕事の総体を紹介する点が、若干弱くなったと考える。来年度はこのあたりのバランスにも留意していきたい。

工芸館：博物館実習期間中以外にも、大学との提携に力を入れており、熟覧や個別のギャラリートークを通して、研究者および制作者との協力関係を深めるように努めているが、今後はこうした校外授業や当館研究員の派遣等、大学のカリキュラムとの連携を積極的に築けるようアプローチを試みたい。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

○実績

本館

1. 登録人数 ガイドスタッフ20人（研修中、平成15年5月10日の研修終了時に正式に登録予定）
2. 活動内容 4-5月にかけて他館へのヒヤリングを行い、これらを参考に募集要項を定め、9-11月に募集、12月に書類と面接により選考を行い、20名を研修生として採用した。12月より平成15年度5月まで全10回の研修を行い、現在は研修の第9回が終了したところである。
3. 今後の取組み 平成15年5月の活動開始に向け、残り1回の研修を行う。具体的な活動は、当面開館日の午後2時半より約1時間、来館者との対話を交えながら、作品を解説する活動を中心に考えている。

工芸館

展覧会での解説および触知による作品鑑賞補助のためのボランティア導入を平成16年度に予定している。本年は、ボランティア導入実施について、とくに平成15年度から開始する募集・教育について検討し、準備を進めた。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：活動内容（毎日1回定時の作品ガイドを行う）や活動の方針（作品と来館者を結ぶ掛け橋となる）、当館の受入れ体勢などについて慎重な検討を加えて募集に踏み切ったことで、現在20人のガイドスタッフに対する定研修は現時点まで、かなり円滑に進んでいると考えている。これまでの全10回の研修は、主に研究員による美術史講義、研修生による作品ガイド実習と問題点のディスカッションから成っているが、ガイドスタッフの積極的な活動意欲を強く感じている。特に作品ガイドについては、作品について一方的に説明するのではなく、参加者とディスカッションを行いながら、ガイドスタッフと参加者がともに鑑賞するスタイルを採用し、当館の特色を打ち出すものとなっている。

工芸館：「昭和の桃山復興」展開催期間中、都立九段高校茶道部との協力関係により、抹茶提供サービスをボランティアにより行った。今後は、生涯教育的な視点とともに、このような学校教育との連携による活動も取り組んでいきたい。

【見直し又は改善を要する点】

本館：今後活動の進展にあわせて、活動内容等について絶えず点検、検討を加えていきたいと考えている。円滑な導入を進めることが課題と考える。

工芸館：ボランティアに関しては、平成16年度導入を目途に現在準備を進めている。会場での解説だけでなく、工芸作品の触知による鑑賞を促すために、独自の視点で実施できるような工夫を考えたい。また、専門性の高い工芸の知識や鑑賞のポイントを予備知識を持たない幅広い年齢層の利用者にもわかりやすく伝えられるよう、他館の状況などを踏まえて検討していきたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

○実績

1. 企業等との連携

①「写真の現在2 サイトー場所と光景展」

協力：ダイマクション、白石デザインオフィス、株式会社マグナム、日本油脂株式会社

②「現代美術への視点 連続と侵犯展」

協力：日本航空、中部電磁器工業株式会社、ブリティッシュ・カウンシル

協賛：株式会社 資生堂

助成：国際交流基金

③ (株) エレメントから美術館活動に対して30万円の助成を得た。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今年度は自主企画展においては、作品制作、輸送について6つの企業から多くの協力を、また1社から協賛を得ることができた。また、このほかに民間の企業ではないが、「現代美術への視点 連続と侵犯展」ではブリティッシュ・カウンシルの協力、「ヴォルフガング・ライブ展」では国際交流基金の助成を得た。

【見直し又は改善を要する点】

昨今の経済状況にあって渉外活動は極めて厳しいものがあるが、今後も資金面に限らない広範囲の協力を得られるよう努力したい。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等

(1) 本館

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| ①障害者トイレ | 3個所（1階 1個所, 2階 1個所, 地下1階 1個所） |
| ②障害者エレベータ | 2基 |
| ③段差解消（スロープ） | 2個所（正面玄関） |
| ④貸出用車椅子 | 5台（1階） |

(2) 工芸館

- | | |
|-----------|-------------------|
| ①障害者トイレ | 1箇所（1階） |
| ②障害者エレベータ | 1基（1階）（障害者対応ではない） |
| ③スロープ | 1個所（正面玄関） |
| ④リフト | 1基（正面玄関） |
| ⑤貸出用車椅子 | 3台（1階） |

2. 観覧環境の充実

- | | | |
|--------|--------------------|--------------------|
| ①音声ガイド | 日本語 | |
| ②展覧会名 | カンディンスキー展 | 小倉遊亀展 |
| ③貸出期間 | H14. 3. 26～5. 26 | H14. 8. 20～10. 6 |
| ④貸出件数 | 9, 550件(利用率8. 20%) | 6, 644件(利用率5. 69%) |

3. 夜間開館等の実施状況

(1) 夜間開館実施状況

- 本館 ア. 開催日数 74日間
 イ. 入館者数 20, 884人（総入場者数 404, 048人, 入場者率 5. 17%）
 ウ. 実施日 別紙、夜間開館実績調べを参照

(2) 小中学生の入場料の低廉化

独立行政法人国立美術館では平成14年4月1日から小中学生の常設展入場料を無料化したが、東京国立近代美術館では、これに先駆けて、本館は平成14年3月26日から、工芸館は平成14年2月23日から実施するとともに、特別展についても同様とすることとした。共催展については共催者の了解の得られたものから無料化を実施することを決定し、平成14年度開催の全ての共催展で小中学生の無料化が実現した。

(3) (2) 以外の入場者料金の取り組み方

- ア. 平成15年度から学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を図るための諸準備を行った。
- ・ 美術館

学生	130円（団体 70円）	→	大学生	130円（団体 70円）、高校生	70円（団体 40円）
----	--------------	---	-----	------------------	-------------
 - ・ 工芸館

学生	130円（団体 70円）	→	大学生	70円（団体 40円）、高校生	40円（団体 20円）
----	--------------	---	-----	-----------------	-------------

・ フィルムセンター（普通観覧）

学生 100円（団体 50円）→ 大学生 70円（団体 40円）、高校生 40円（団体 20円）

イ. ワールドカップ時の対応

外国人来館者に対し常設展及び特別展の入場料を無料とした。（要パスポート提示）

本館 常設展 平成14年5月30日～7月 7日（34日間）584人

特別展「写真の現在2」 平成14年6月18日～7月 7日（18日間）369人

工芸館 常設展 平成14年5月30日～6月30日（28日間）250人

ウ. 江戸開府400年記念事業

平成15年度に開始される江戸開府400年記念事業「ぐるっとパス（常設展共通入場券）」の参加準備を実施し、入場料金の低廉化を図った。

「ぐるっとパス」は、都内の美術館、博物館、動物園など31機関が参加するもので、全ての機関に入場した場合、通常15,000円程度の料金が1,800円で利用できるチケットである。

(4) その他の入館者サービス

東京国立近代美術館の事業運営・展示活動等について、より多くの来館者に理解を深めてもらうために小冊子「東京国立近代美術館あんない」を配付し広報に努めた。

また、展覧会案内（カレンダー）、会場ガイド、出品作品リスト（日本語版、英語版）を配付し観覧者サービス並びにリピーター増進に努めた。

工芸館においても会場ガイド、出品作品リストの配付はもとより、特集展示（小企画展）開催時には、鑑賞の補助として小冊子を配布し、また常設点開催時には工芸作品をより親しんでもらうため、所蔵作品の鑑賞カード（無料）を展示会場に置くなど観覧者へのサービスに努めた。

4. アンケート調査(1)-3

①調査期間 平成14年 7月31日～平成14年 8月 4日（5日間）（写真の現在2・森正洋展）

平成14年10月 3日～平成14年10月 6日（4日間）（小倉遊亀展）

平成14年11月13日～平成14年11月24日（11日間）（現代美術の視点展）

平成14年11月21日～平成14年11月24日（4日間）（昭和の桃山復興展）

平成15年 2月15日～平成15年 2月23日（5日間）（ドイツ工作連盟展）

平成15年 2月27日～平成15年 3月 2日（6日間）（ライブ展）

平成15年 3月20日～平成15年 3月23日（4日間）（常設展）

②調査方法 来館者に手渡、記述式（午前・午後各1時間）＊夜間開館1時間

③アンケート回収数 872件（母集団 238,529人）

④アンケート結果 ・良い51.3%（447件）・普通36.2%（316件）・悪い12.5%（109件）

5. 一般入館者等の要望の反映

①従来おおむね春分から秋分までの期間に夜間開館実施していたが、今年度から金曜日を通年実施とした。

②今年度開催された展覧会及び常設展示の小中学生入場料金を無料とした。

③当館主催の特別展開催時に「チケットぴあ」と前売券販売委託契約を結び観覧券の前売券の販売を行った。

④アトライブラリー開室日を火曜日から金曜日であったものを、今年度より土曜日も開室することで、一般利用者並びに観覧者が利用する機会を増やした。

⑤ワールドカップ開催期間中、外国人来館者向け（受付案内）文化ボランティアを実施した。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実

レストランについては、平成14年1月のリニューアルオープンより木曜日、金曜日を午後9時30分まで夜間営業としていたが、今年度から土曜日も夜間営業することで来館者が観覧後に食事休憩などができる機会の増進を図った。また4階休憩コーナーにおいて飲み物を廉価で販売するなど来館者サービスに努めた。

ミュージアムショップについては、共催展の関連グッズはもとより、当館主催の特別展・企画展に伴う展覧会の関連書籍コーナーを設けるなど販売品の充実に努めた。

工芸館においては、館内が狭隘なことと、環境省の指導により敷地内にレストランなどの設置はできないが、展覧会開催時にテーマに則した飲食物販売コーナーを設け来館者サービスに努めた。

又、工芸館でのグッズ販売については、狭隘なスペースのなか陶芸製品・書籍・雑誌等の工芸館の特色を生かしたグッズ選別に努めた。また、展覧会開催時には共催者と協議しグッズ等の販売物の充実に努めた。

○自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

毎週第1日曜日の常設展及び文化の日は特別展も含む全ての入館料金を無料とし、多数の入館者があり、好評を得た。

特別展及び共催展の前売券を「チケットぴあ」（共催展は当館券売所においても販売）において販売し、観覧券購入の利便性を図ったことで来館者の増加に反映した。

工芸館において、工芸作品をより親しんでもらうため、所蔵作品の鑑賞カードを無料配付し、観覧者サービスとリピーターの増進に努めた。また、特別展「昭和の桃山復興—陶芸近代化の転換点—」開催時に、近隣女子高の茶道部と協力し、毎週土曜日に抹茶と和菓子セットを廉価（500円）で来館者に提供し好評を得た。今後も工芸館の特色を生かしたサービスに努める。

【見直し又は改善を要する点】

平成14年1月のリニューアルオープン「未完の世紀展」から10月上旬「小倉遊亀展」終了まで、木曜日及び金曜日に夜間開館を実施。引続き金曜日を通年実施することとなったが、アンケート調査から夜間開館日を増やして欲しいとの要望が多かった。

年間利用者の推移から展覧会開催時の利用者が多く、今後、共催展開催時の夜間開館を検討する必要がある。今後、観覧環境について美術館、学校教育、社会教育、レストラン関係者等から意見を聞く場を設け、これらの意見を参考にしながら、より一層の観覧環境の向上を目指したいと考えている。

美術作品の購入一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館

種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状	寸法 (cm)	備考
日本画	今村紫紅	笛	1900年頃	絹本彩色 軸装	107.8 × 40.5	
洋画	中村彝	大島風景	1914-15年	油彩・キャンバス	59.5 × 59.5	
洋画	靉光	蝶	1942年	油彩・キャンバス	43 × 36	
洋画	草間彌生	残骸のアクミレーション (離人カーテンの囚人)	1950年	油彩・エナメル・麻布(種袋)	72.3 × 91.5	
洋画	秋岡美帆	光の間 02-5-16-4	2002年	ネコブリント・麻紙	220.0 × 275.0	
洋画	岡崎乾二郎	屋根の熱気に吹きつけられ、祖父の顔は頭蓋骨のようにもう色褪せて見える。ところで彼は何と云ったのでしたっけ？灼熱の焼きごてを眼に入れられようとしたときに、「僕の美しいお友達、火よ。もう少しやさしくお願いします」。大丈夫、安心なさせて。姉は日傘を取りにいき、祖父は指先をまるく尖った舌で冷やしていた。	2002年	アクリリック・キャンバス	180.0 × 130.0 × 5.0	
洋画	岡崎乾二郎	背後から火事が迫ってきたとでもいうの、この顔の青さは普通じゃないわ、どうしたの？ぼつりと答えます。「惜しいと思うほどの物は握まよう」と遠いかけず、一生惜しんで思い出せるようにしておいたほうがいいんだよ。そうか、胡瓜の漬け方を、お婦人から貰ったときみたいに、熱した実がひとりどりに落ちる音を聞いた。	2002年	アクリリック・キャンバス	180.0 × 130.0 × 5.0	
洋画	李禹煥	風と共に	1990年	油彩・顔料・キャンバス	291.0 × 218.0	
版画	郭徳俊	レーガン と郭	1985年	シルクスクリーン ed.17/20	53.6 × 38.6	
版画	郭徳俊	ブッシュと郭	1989年	シルクスクリーン ed.17/30	53.3 × 41.0	
版画	郭徳俊	クリントンと郭	1993年	シルクスクリーン ed.3/30	54.6 × 41.2	
版画	郭徳俊	クリントン と郭	1997年	シルクスクリーン ed.13/30	51.5 × 37.3	
版画	郭徳俊	ブッシュ2001と郭	2001年	シルクスクリーン ed.6/20	54.0 × 36.3	
版画	ロヴィス・コリント	版画集「死の舞踏」	1921-22年 (1922年刊)	銅版(5点組) ed.7/25	24.0 × 17.8他	
素描	瑛九	無題	1937年	コラージュ・紙	27.6 × 23.2	
素描	瑛九	無題	1937年頃	コラージュ・紙	27.6 × 23.3	
彫刻	A.ゴームリー	反映 / 思索 (Reflection)	2000年 (2001年鑄造)	鑄鉄 2体 1/3	各191 × 68 × 37	
彫刻	鷺見和紀郎	ダンス - 4	2001年	石膏	131.0 × 42.0 × 30.0	
彫刻	鷺見和紀郎	ダンス - 6	2002年	石膏	88.0 × 30.0 × 30.0	
彫刻	黒川弘毅	Eros No.29	2002年	ブロンズ	87.0 × 48.0 × 24.0	
写真	北井一夫	「村へ」より 田舎道 宮城県石巻市	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.8x29.3(25.5x31.1)	
写真	北井一夫	「村へ」より 馬方 宮城県石巻市	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.2x28.5(25.7x30.4)	
写真	北井一夫	「村へ」より 夜 宮城県石巻市	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.8x29.1(23.8x31.1)	
写真	北井一夫	「村へ」より リヤカー 岩手県沢内村	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.0x28.6(25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 湯治場 秋田県孫六湯	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.4x28.6 (25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 湯治場 秋田県孫六湯	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.3x28.7 (25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 海辺 宮城県石巻市	1973年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.8x29.0 (25.3x31.1)	
写真	北井一夫	「村へ」より 嫁入りの日 岡山県久米町	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	28.0x19.2(30.5x25.7)	
写真	北井一夫	「村へ」より 嫁入り 岡山県久米町	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.3x28.9 (22.7x30.6)	
写真	北井一夫	「村へ」より 雪の中で 秋田県湯沢市	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.1x28.5 (25.7x30.4)	
写真	北井一夫	「村へ」より カマクラ 秋田県横手市	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.4x28.6 (25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 店屋 鳥取県米子市	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.6x29.4 (25.6x30.4)	
写真	北井一夫	「村へ」より 店屋 島根県隠岐島	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.7x29.2 (25.8x30.4)	
写真	北井一夫	「村へ」より お盆 岡山県久米町	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.4x28.7 (25.6x30.4)	
写真	北井一夫	「村へ」より 葬式 青森県木造町	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.3x28.7 (25.8x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 稲刈りのころ 滋賀県湖北町	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	28.6x18.9 (30.4x25.6)	

美術作品の購入一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館

種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm)	備考
写真	北井一夫	「村へ」より しげの日 北海道神 恵内市	1974年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.0x28.2 (25.8x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 桑畑 群馬県大胡町	1975年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.4x28.7 (24.2x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より エジコ 秋田県阿仁 町	1975年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.3x28.5 (24.6x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 木地師 福島県弥平 四郎	1975年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.3x24.0 (25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 木地師 福島県弥平 四郎	1975年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.4x28.9 (25.7x30.5)	
写真	北井一夫	「村へ」より 市場 沖縄県那覇市	1975年	ゼラチン・シルバー・プ リント	19.2x28.4 (25.6x30.4)	
写真	伊藤義彦	回廊	2000年	ゼラチン・シルバー・プ リント	23.2x124.1	
写真	伊藤義彦	葬列77	2002年	ゼラチン・シルバー・プ リント	20.7x167.5	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	フローランス・アンリ	フローランス・アンリ ポートフォリオ	1974年	12点組、制作:ギャ ラリー・ヴィルデ、 ed.48/50		
写真	フローランス・アンリ	コラの肖像、バリ	1928年(1974 年プリント)	ゼラチン・シルバー・プ リント	25.2x21.5	
写真	フローランス・アンリ	運搬車橋、マルセイユ	1929年(1974 年プリント)	ゼラチン・シルバー・プ リント	18.6x24.5	
写真	フローランス・アンリ	花屋のウィンドー、バリ	1932年(1974 年プリント)	ゼラチン・シルバー・プ リント	25.7x20.8	
写真	アンドレ・ケルテス	アンドレ・ケルテス・ポートフォリオ	1982年	10点組、オリジナ ルネガからのコン タクトプリント、制 作:Ormind a Corporation		
写真	ヤロミール・フンケ	ヤロミール・フンケ・ポートフォリオ	1995年	10点組、制作:ブラハ ハウス・オブ・フォトグラ フィ、ed.25/30		
陶磁	熊倉順吉	男の肖像	1983年	陶器	h17.0、11.0×9.5	
陶磁	富本憲吉	染付陶板"京城東大門満月"	1934年	磁器	27.6	
陶磁	初代宮川香山	鳩桜花図高浮雕花瓶 一対	1871-82年	磁器	左:h35.3、d24.3 右:h35.6、d26.7	
陶磁	八木一夫	水注	1970-74年	陶器	h15.2、16.5×10.2	
陶磁	ハンス・コパー	スベード・フォーム	1970年頃	陶器	h28.2、25.9×8.0	
陶磁	バーナード・リーチ	ティー・セット	1920-29年	陶器	カップ:h5.5、11.0×9.0 ソーサー:h2.5、d13.5 ミルクポット:h9.0、13.0× 11.0 ポット(大):h6.5、d12.5 ポット(小):h4.5、d12.5	
染織	小名木陽一	赤い手ぶくろ	1976年	木綿	h260.0	
漆工	古伏脇 司	草舟 98-01	1998年	漆、乾漆	h44.5、30.4×58.0	
竹工	飯塚琅 斎	手筈	不詳	竹	h17.3、27.3×37.7	
竹工	飯塚琅 斎	花籃 久寿玉	1950年頃	竹	h38.0、30.7×34.1	
ガラス	大村俊二	流(Ryu)	2001年	ガラス	h52.0、30.0×54.0	
ガラス	藤田喬平	虹彩	1964年	ガラス	h34.4、d38.0	
ガラス	藤田喬平	節筈 菖蒲	1973年	ガラス	h13.2、12.0×24.4	

美術作品の購入一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館

種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm)	備考
グラフィック・デザイン	レイモン・サヴィニャック	ミシュラン	1966年	リトグラフ	h232.5 × w316.5	
グラフィック・デザイン	ノーマン・ロックウェル	窮乏からの自由・国連憲章 <4つの自由>の連作のうち	1943年	オフセット	172.7 × 132.8	

美術作品の寄贈一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館

種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm)	備考
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	41.0x52.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	鈴木理策	サント・ヴィクトワール山	2001年	タイプCプリント	95.0x120.0	
写真	アイラ・H.ラトゥール	エドワード・ウェストン、ワイルドキャット・ヒル、カメレ	1950年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.3x18.4(25.1x20.3)	
写真	アイラ・H.ラトゥール	オスカー・ココシュカ、ホーベンザルツブルク	1953年	タイプCプリント	27.8x35.9	
写真	アイラ・H.ラトゥール	キッキング・ホース・エドワード・ビュイー、シオース、チョコ	1999年	ゼラチン・シルバー・プリント	25.0x25.0(35.4x27.9)	
写真	アイラ・H.ラトゥール	アンセル・アダムズによる1945年のポートレイトを持つ自画像、チョコ	2000年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.9x18.9(25.2x20.3)	
陶磁	河井寛次郎	花鳥図壺	1926年頃	磁器	h28.2、d16.0	
染織	中村光哉	友禅小屏風 独り	1988年	友禅	h68.5 x w160.0	
漆工	本間舜華	花野乾漆六稜硯筥	1964年	蒔絵、乾漆	h4.6、32.8 x 25.3	
漆工	本間舜華	浄節筥	1966年	蒔絵	h12.9、27.5 x 39.5	
木工	佐藤豊樵	樺八角喚籠	1980年	木、指物	h15.2、30.3 x 30.3	
工業デザイン	森 正洋	G型しょうゆさし	1958年	磁器	L:h9.0、9.5 x 6.8 S:h7.2、7.7 x 5.6	
工業デザイン	森 正洋	ファンシーカップ	1969年	磁器	h11.4、d7.0 ~ 8.5	
工業デザイン	森 正洋	白磁千段シリーズ	1971年	磁器	土瓶:h9.3、16.0 x 12.5 湯呑み:h5.8、d7.8 コーヒーポット:h8.8、20.6 x 10.0 コーヒーカップ:h5.8、9.4 x 7.1 ソーサー:h2.1、d9.3 めしわん:h5.1、d12.0 皿:h3.2、d30.8 ~ h1.6、d10.5他	
工業デザイン	森 正洋	P型コーヒーセット	1974年	磁器	ポット:h11.7、16.7 x 9.4 カップ:h6.4、11.0 x 9.4 コースター:h1.5、12.0 x 12.0 シュガーポット:h6.7、D7.2 クリマー:h5.4、8.2 x 7.0	
工業デザイン	森 正洋	F型コーヒーカップ	1974年	磁器	コーヒーカップ:h5.2、10.2 x 7.0 デミタス:h4.8、8.9 x 6.0 コースター:h1.5、12.0 x 12.0	
工業デザイン	森 正洋	マルチブルー	1976年	磁器	ポール:h10.7、d23.7 ~ h4.8、d11.8 皿:h4.1、d32.1 ~ h2.1、d10.0 スープ皿:h4.3、d18.0	
工業デザイン	森 正洋	A型パーティトレイ	1976年	磁器	大:h2.0、66.7 x 11.0 中:h2.0、43.2 x 11.0 小:h2.0、21.7 x 11.0	
工業デザイン	森 正洋	ロックセット	1978年	磁器	アイスサーバー:h9.4、15.8 x 15.0 ピッチャー:h16.8、11.5 x 9.3 カップ:h7.3、d7.9 ワインカップ:h6.2、d6.2	
工業デザイン	森 正洋	シェルボール	1982年	磁器	h13.0、d22.0 ~ h4.4、d8.0	
工業デザイン	森 正洋	シェル皿	1982年	磁器	h4.5、d33.2 ~ h2.4、d11.0	
工業デザイン	森 正洋	O型パーティセット	1984年	磁器	L:h1.8、32.5 x 17.8 S:h1.8、d12.0	

美術作品の寄贈一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館

種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm)	備考
工業デザイン	森 正洋	平形めし茶碗	1992年	磁器	h5.1、d15.0	
工業デザイン	森 正洋	角型冷酒器、盃	1993年	磁器	注器:h14.8、23.0×16.2 台皿:h2.2、13.8×13.8 盃:h4.8、4.5×4.8	
工業デザイン	森 正洋	丸型冷酒器、盃	1993年	磁器	注器:h15.6、22.0×13.8 盃:h5.0、d4.4	
工業デザイン	森 正洋	パーティプレート“セラベスク”	1994年	磁器	A:h3.3、24.2×13.3 B:h3.3、24.2×17.7 C:h3.3、30.5×27.0 D:h3.3、30.5×31.0	
工業デザイン	森 正洋	ポット、蓋付カップ	2002年	磁器	ポット:h13.2、18.0×10.9 マグカップ:h9.2、10.9×8.2	
工業デザイン	レイ&チャールズ・イームズ 製作:ハーマン・ミラー社	ワイヤーメッシュ・チェア	1951-53年	皮、スチールワイヤ	h81.3、48.0×52.5	
工業デザイン	レイ&チャールズ・イームズ 製作:ハーマン・ミラー社	合板ラウンジチェア	1946年	合板、スチールパイプ	h68.0、56.0×61.0	

修理した美術作品の一覧(平成14年度)

館名:東京国立近代美術館本館・工芸館

種別	作者名	作品名	備考
日本画	浜田観	晨(あした)	
日本画	野田九浦	辻説法	
日本画	岸田劉生	五福祥集	
洋画	藤田嗣治	少女像	
洋画	石川虎治	鎮江攻略	
洋画	有岡一郎	玉葱をむく女	
洋画	高松次郎	No.273(影)	
洋画	藤尾龍四郎	ミルス(群像習作)	
洋画	高井貞二	火の鳥	
洋画	山口長男	象	
洋画	宇治山哲兵	No.149 響	
水彩	南薫造	少女	
水彩	大下藤次郎	穂高山の麓	
版画	池田満寿夫	動物の婚礼	
版画	池田満寿夫	タエコの朝食	
版画	池田満寿夫	化粧する女	
版画	碓伊之助(三彩亭)	窓	
版画	碓伊之助(三彩亭)	尼寺	
版画	長谷川潔	ロエの村道(教会への道)	
版画	長谷川潔	二つのアネモネ	
版画	長谷川潔	裸婦	
版画	長谷川潔	花(レースをバックにした花瓶の三つのアネモネ)	
版画	長谷川潔	一樹(ニレの木)	
版画	長谷川潔	コップに挿した枯れた野花	
版画	長谷川潔	アカシアの老樹	
版画	長谷川潔	窓上の人形	
版画	長谷川潔	半開の窓	
版画	長谷川潔	野辺小禽	
版画	長谷川潔	瓶の秋草(ピエ・ド・シェーブル)	
版画	長谷川潔	玻璃球のある静物	
版画	長谷川潔	黄金律(賀状用)	
版画	長谷川潔	骰子独楽と幸福の星	
版画	浜口陽三	青いガラス	
版画	浜口陽三	西瓜	
版画	浜田知明	初年度兵哀歌 歩哨	
版画	浜田知明	グラン=プラス	
版画	棟方志功	天妃乾坤韻	
素描	瑛九	デッサン9	
素描	土田麦僊	タンポポ写生の図	
素描	土田麦僊	菊の写生	
彫刻	ソル・ルウィット	形態の複合 No.6	
彫刻	平櫛田中	鏡獅子	
彫刻	高松次郎	遠近法による椅子とテーブル N0.886	
彫刻	北代省三	モビールオブジェ(回転する面による構成)	
漆工	松田権六	蒔絵桜鳥平卓	

(1) 収蔵品の調査研究

名称	研究者名	内容	外部研究者との交流実績	研究成果の公開(図録・研究紀要・セミナー)	備考
『東京国立近代美術館ギャラリーガイド 近代日本美術のあゆみ』	市川政憲、尾崎正明、古田亮、蔵屋美香、都築千重子、大谷省吾、鈴木勝雄、松本透	主な所蔵作品によって近代日本美術の流れをたどる。所蔵作品展「近代日本美術の歩み」のためのギャラリーガイド。	特になし	『東京国立近代美術館ギャラリーガイド 近代日本美術のあゆみ』	
『コレクションのあゆみ 1952 - 2002』	大谷省吾、尾崎正明、市川政憲、蔵屋美香、古田亮、鈴木勝雄、都築千重子、保坂健二郎、増田玲、松本透	開館50周年を記念し、主な所蔵作品によって当館の50年のあゆみを振り返る。	特になし	『コレクションのあゆみ 1952 - 2002』展カタログ	
『北脇昇の『図式』絵画について』	大谷省吾	当館に多くの作品を所蔵する北脇昇の作品について、「図式」の観点から考察。	特になし	研究紀要第7号	
『古賀春江(海)のモダンガール、再考』	大谷省吾	表題の作品について、新出資料をもとに考察。	特になし	『現代の眼』533号	
『襲光(馬)をめぐる』	大谷省吾	表題作品について、新出資料をもとに考察。	特になし	『現代の眼』534号	
『境界を描くこと 南薫造の(少女)における庭』	保坂健二郎	所蔵作品展における特集展示に基づく、表題作品の考察。	特になし	『現代の眼』535号	
『浴室の幾何学 近代日本の絵画にみるグリッドについて』	三輪健仁	小倉遊亀、河原温の作品について考察	特になし	『現代の眼』536号	
『ディテールの誘惑 ベン・ニコルソン(静物 緑と茶)』	鈴木勝雄	表題作品の詳細な分析に基づく考察。	特になし	『現代の眼』537号	
『李禹煥の制作における『倫理』』	保坂健二郎	表題作家の制作理念についての考察。	特になし	『現代の眼』538号	
藤田嗣治の1920 - 40年代の作品について、作品解説	尾崎正明	藤田嗣治の1920 - 40年代の作品について、作品解説として考察	清水敏男(清水敏男事務所)	『藤田嗣治画集 素晴らしき乳白色』2002年 講談社	

(2) 展覧会のための調査研究

名称	研究者名	内容	外部研究者との交流実績	研究成果の公開(図録・研究紀要・セミ)	備考
カンディンスキーのロシア時代に関する研究	中林和雄、鈴木勝雄	従来国外に紹介されることの少なかった、カンディンスキーのロシア時代について考察。	ドミトリー・サラビヤーフ(ロシア連邦科学アカデミー正会員)、新田喜代見(美術史家)	『カンディンスキー展』カタログ	
日本の現代写真におけるサイト(場所/光景)の問題に関する研究	増田玲、蔵屋美香	日本の現代写真家8人の作品におけるサイト(場所・光景)の意味について、作家へのインタビューも交え考察。	伊藤義彦、勝又邦彦、兼子裕代、小林のりお、鈴木理策、野口里佳、港千尋、横澤典(展覧会出品作家)	『サイト - 場所と光景』展カタログ	
小倉遊亀に関する研究	尾崎正明、古田亮	小倉遊亀の画業について、戦前(尾崎)、戦後(古田)に分けて考察	高梨純次・岩田由美子(滋賀県立近代美術館)、中島理寿	『小倉遊亀展』カタログ	
現代美術における美術史への連続と侵犯に関する研究「連続と侵犯」	中林和雄、蔵屋美香、保坂健二郎	現代美術における1)従来の美術史への、2)美術の外部たる「現実/日常」への、連続と侵犯について、作家へのインタビューも交え考察。	青木淳、キャンディス・プレイツ、遠藤利克、ロラン・フレクスナー、ロニ・ホーン、イリヤ&エミリア・カバコフ、ロン・ミュエク、中山タイスケ、ジュリアン・オピー、高嶺格(展覧会出品作家)	『現代美術への視点 連続と侵犯』展カタログ(本冊・別冊)	
ヴォルフガング・ライプに関する研究	松本透、三輪健仁、鈴木勝雄	表題作家の作品を、主に生命という観点より考察。	ヴォルフガング・ライプ(出品作家)、バーバラ・カトワール、クリストフ・シュライアー	『ヴォルフガング・ライプ』展カタログ	
「サイト - 場所と光景」	増田玲	展覧会企画及びカタログ論文		『写真の現在2 サイト - 場所と光景』、展覧会カタログ、東京国立近代美術館、2002	
「写真の収集」(章解説)	増田玲	カタログ章解説		『開館50周年記念 コレクションのあゆみ 1952 - 2002』、展覧会カタログ、東京国立近代美術館、2002	
「日本文化の多重構造 近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年-1980年」	尾崎正明(研究代表者)、市川政憲、大谷省吾、蔵屋美香、鈴木勝雄、都築千重子、中林和雄、古田亮、保坂健二郎、増田玲、松本透、水谷長志	日本における文化の多重性を、「ロマンティズムの系譜」「東北の作家たちと風土」「関西の作家たちと風土」「岡本太郎と文化人類学」「柳宗悦と朝鮮、民芸」「沖縄、島の時空」の6つのトピックにより考察	植野健造、森山秀子(石橋財団石橋美術館)	特になし(平成16年度に報告書刊行予定)	

(3) その他

名称	研究者名	内容	外部研究者との交流実績	研究成果の公開(図録・研究紀要・セミ)	備考
「世界の突端の展望室で」	蔵屋美香	当館でも作品を所蔵する作家、エミコ・サワラギ・ギルバートの個展に際し、その作品を考察。	特になし	ギャラリー人ニュース第8号 2003年2月	
藤田嗣治の1920 - 40年代の作品について・作品解説	蔵屋美香	藤田嗣治の1920 - 40年代の作品について、作品解説という形で考察。	清水敏男(清水敏男事務 ところ)	『藤田嗣治画集 素晴らしき乳白色』2002年、講談社	
若手作家(秋山さやか)の推薦	蔵屋美香	若手作家の登竜門であるVOCA展において、推薦者を勧めた	上野の森美術館	『現代美術の展望—新しい平面の作家たち』展および同展カタログ	
ジョン・コトン・ダイナのミュージアム観についての研究	水谷長志	アメリカの図書館員であり博物館のパイオニアであったジョン・コトン・ダイナについての書誌的調査を踏まえた研究		『ジョン・コトン・ダイナのニュー・ミュージアム: 書誌的覚え書き』『東京国立近代美術館研究紀要』第7号(東京国立近代美術館、2002年)	
「観る人、思索する人、作る人 - 伊藤義彦の創作プロセス」	増田玲	論文		『芸術館季報Raku』Vol.27、京都造形芸術大学、2002	
「[レビュー]井口壽乃著『ハンガリー・アヴァンギャルド MAとモホイ=ナジ』」	増田玲	書評		『映像学』第69号、日本映像学会、2002	
外山卯三郎 - 「純粹絵画」の名のもとに	大谷省吾	美術評論家列伝特集のひとつとして戦前に活躍した外山卯三郎の伝記および彼の美術論の考察	明治美術学会 会員の共同研究として同学会誌に発表	『近代画説』11号、明治美術学会、2002年12月	
ジョン・コトン・ダイナのミュージアム観についての研究	水谷長志	アメリカの図書館員であり博物館のパイオニアであったジョン・コトン・ダイナについての書誌的調査を踏まえた研究		『ジョン・コトン・ダイナのニュー・ミュージアム: 書誌的覚え書き』『東京国立近代美術	
現代美術の調査研究	松本 透	版画家・山口啓介の活動の回顧および解釈	西宮市大谷記念美術館学芸員・池上司ほか	『山口啓介の光学』『山口啓介 植物の心臓、宇宙の花』展カ	
美術館学の調査研究	松本 透	東京国立近代美術館の沿革および活動の概論	武蔵野美術大学教授・岡部あのみ他	『東京国立近代美術館』『ミュージオロジ—実践篇/ミュージアムの世界へ』(岡部あのみ監修、武蔵野美術大学出版局、2003)	